

# 大菩薩峠

女子と小人の巻

中里介山



伊勢から帰った後の道庵先生は別に変ったこともなく、道庵流に暮らしておりました。

医術にかけてはそれを施すことも親切であるが、それを研究することも根こんがよく、ひまがあれば古今の医書を繙ひもといて、細かに調べているのだが、どうしたものか先生の病で、「医者なんという者は当あてにならねえ、人の病気なんぞは人間業にんげんわざで癒なおせるもので無ねえ」と言つて、自分で自分を軽蔑けいべつしたようなことを言うから変り者にされてしまいます。そうかと思うと、「人の命を取ることにかけては新撰組の近藤勇よりも、おれの方がズツト上うわて手だ、今まで、おれの手にかけて殺した人間が二千人からある」な

んというようなことを言い出すから穏かでなくなつてしまうのです。どこから手に入れたか、この日は舶来はくらいの解剖図かいぼうずを拡げて、それと一緒に一挺ちようのナイフを弄りながら独言ひとりごとを言っています。

「毛唐けとうは面白いものを作る、こうすれば鎌になる」

ナイフの刃を角かくに折り曲げて鎌の形にし、

「それからまた、こうすれば燧ひうちに使える、こうして引き出せば

庖丁ほうちようにもなり剃刀かみそりにもなる」

たあいなことを言つて、ナイフをおもちやにして解剖図を研究しているところへ、

「先生」

「何だ」

「お客でございます」

「お客？ いま勉強しているところだから、大概たいがいのお客なら追

払つちまえ」

「与八さんが来ました」

「与八が？」

「与八さんが馬を曳ひいて来ました」

「与八が馬を曳ひいて来た？ そいつは面白い、こつちへ通せ」

与八が沢井から久しぶりで道庵先生を訪れて来ました。

「与八、お前が来たから今日は、おれも久しぶりで江戸見物をやる、どうだ、両国へでも行つてみようか」

「お伴ともをしましょう」

その翌日、道庵は与八をつれて両国へ出かけました。与八の背には郁太郎いくたろうが温和おとなしく眠っています。

道庵先生は両国へ行く途中も、例の道庵流を發揮して通りがかりの人を笑わせました。

「あそこが両国だ、大きな川があるだろう、間あいを流るる隅田川と  
いうのがあれだ。向うは上総かずさの国で、こつちが武蔵の江戸だか  
ら、昔し両国橋と言ったものだが、今はあつちもこつちもお江  
戸のうちだ。どうだい、景気がいいだろう、幟のぼりがあの通り立っ  
てらあ、橋の向うとこつちに見世物小屋が並んでる、見物人が  
いつでもあの通り真黒だ、木戸番が声をか嘎からしていやがる。与  
八、うっかりあの前へ行つてポカンと立っているときんちやくきり巾着切しに中着切ちやくきりに巾  
着を切られるから用心しろ、ぐずぐずしていると迷ま児いになるか  
ら、おれの袖をしっかりとつか捉つかめえていろ、自分の足を踏まれぬよ  
うに、背中の子供を押しつぶされねえように気をつけて」  
こうして二人は両国ひとごの人混みへ入り込んで行きました。

「先生、こりゃ何だい」

与八はいちいち見世物の絵看板の前で立ち止まる。

「こりやその駱駝らくだの見世物だ」

「駱駝らくだというのは何だろう、馬みたような変てこなものだな」

「そりや南蛮なんぼんの馬だ」

「背中に瘤こぶがある」

「あれが鞍くらの代りになる」

「おおきな瘤こぶだな」

「はははは」

「先生、こりや何だ」

「これは籠細工かございというものだ、今はやりの籠細工かございというものだ」

「綺麗きれいだなあ」

「その次は竹細工、糸細工、硝子細工びいどろざい、紙細工」

「綺麗きれいだなあ」

「それから駒廻こままわし」

「やあ、駒から水が出ている」

「今度は機関からくり」

「やあ、機関まである」

「女盗賊三島のお仙ときたな、こりや三座太夫だ、次がおで、こ芝居」

「芝居で齒磨を売るのはおかしい」

「はははは」

「それでも先生、『おあいきやう手踊り御齒磨調合人、岩井管くだごろう五郎』と書いてある」

「いや、こいつらは、もと齒磨売りとしてその筋へ願つてあるのだ、芝居をすると言つて始めたのではない、それだから今でも齒磨の看板を出しているのだ」

「ああ、打掛うちかけを着たお姫様が向うを向っている、ありや何だ」



「与八、あんなものを見るものではない、ありや土君子の見るべからざるものだ」

「みんな中で笑っている」

「因果娘、蛇使い、こんなものの前は眼をつぶつて通れ」

「そうですか」

「後ろから見ると、あの通り美しい女に見えるが、前に廻つて見れば言語道断ごんごどうだんのものだ。さあ与八、ここに軽業かるわざがある」

「なるほど、こりやあ軽業だ、軽業、足芸、力持。やあ、大した看板だ、この小屋が今までのうちでいちばん大きいね、これなら一万五千人ぐらい、人が入れべえ」

「そんなに入れるものか、千人は入れるだろうな」

「やあ、あんな高いところ、よくあんな芸当わざができるものだなあ。あんな綺麗な面かおをした娘が逆さかさになつて、足たらいで盥たらいを組み上

げて、その上で三味線を弾いてらあ、エライものだなあ。こつちの方は綱渡りか」

与八は余念なくこの立看板を仰向あおむいて見て行くうちに、

「大評判、印度人槍使い」

ちようどまん中のところに掲げられた、わけて大きくした絵看板の前まで来ました。

「先生、この槍使いの面かおは、こりや何という面だ」

「はははは」

「面も身体も真黒で、眼を光らかして、裸はだか体で槍を持って立っているが」

「こりや印度人だよ、印度といつて天竺てんじくのことだ」

「へえ」

「印度から来た槍使いと書いてある」

「なるほど、印度にも槍があるのかねえ、印度の槍というのは、あんなものかねえ」

「そうだ」

「印度の人というのは、みんなあんなに面も身体も黒いのかねえ」

「黒ん坊ときえ言うからな」

「どうしてあんなに黒くなるんだろうな、染めたわけじゃあるまいねえ」

「染めたわけじゃない、印度は熱い国だから日に焼ける、日に焼けると色があんなに黒くなる」

「へえ」

「なんしろ冬というものがなくって、夏ばかりある国だ、その夏がまた日本よりも十層倍も暑いものだから、そこに住むやつら

は照りつけられて、あんなに黒くなる」

「ずいぶん黒いなあ」

「さあ評判評判、印度の国はガンジス河の河岸で生れました稀代きだいの槍使いはこれでごさい、ごらんの通り、身の丈わずか四尺一寸なれども、槍を使うては神妙不可思議、これまでこの男の槍先に斃たおされましたところの虎が三十八頭、豹ひょうが二十五頭、そのほか猛獸毒蛇をこの一本の槍先で仕留めましたること数知れず、或る時ヒマラヤ山の麓におきまして不意に一頭の猛虎に襲われましたる折に、右の股ももを牙きばにかけられ、すでにこうよと見えたところを、取り直して、グサと突込みました一槍で、猛虎の口から尻まで突き通して仕留めましたその働きが、国王殿下のお耳に入り、この通り首にかけたる金銀のメタル、これが印度国王殿下からの賜わり物にござりまあす。それより以来このかた、当人

は右足の自由を失いました。片足の芸当、高いところは十丈の梁はりの上を走り、低いところは水の底をくぐる、馬に乗りましてこの槍を使いますれば馬上の槍、我が朝におきましては宝蔵院の入道、高田又兵衛といえどもこれには及ばず。嘘偽りうそいつわと思召すなら御見物の方々、御持合せおんもちあわの手裏剣しゅりけんなり鉄扇なり、または備え置きましたる半弓、石、瓦たぐいの類をもつて、御遠慮なく当人の四肢五体いずれへなりともお覘ねらいをつけ下し置かれ、まんいち当人の身に一つでも当りましようならば、その場において、ここにござりまする虎の皮三枚、豹の皮二枚、これをお土産みやげまでにとなた様にも差上げます。長い浮世に短い命、こういうものが二度とふたたび、日本の土地へ参りましようならお目にかかります、孫子まじこに至るまでのお話の種、評判の印度人、ガンジス河の槍使いはこれでございます！」

「ははあ、これがこのごろ評判の槍使いだな」

「先生、本当だんべえかね、本当に印度からこんなエライ槍使いが来ているのかね」

「口上言いの言うことは当あてにならねえが、それでもこのごろは、この見世物がばかに評判だ、まるつきり嘘を言つて評判を立てるわけにもゆくめえから本当かも知れねえよ」

「そうかなあ」

与八はしきりにその印度人槍使いの大看板をながめていますから道庵が、

「与八、これがそんなに気に入ったか。それでは、こいつをひとつ見せてやろう」

「そうしておくんなさい」

「俺もこいつをひとつ見たいと思つていたのだ」

二十四文ずつの木戸銭を払って、道庵と与八はこの小屋の中へ入りました。

小屋の中は摺鉢すりばちのようになって、真中のところが興行場になっていて、見物は相撲を見ると同じように、四方から囲んで見ることになっていきます。

道庵と与八とは土間の程よいところに陣取って、与八は郁太郎を卸おろして膝にかかえ、物珍らしそうに、この大きな小屋がけの天井から板囲いたがこいいっぱいになった見物人の方をながめて、

「たいへん人が入っている」

この時の前芸は駒廻たすきしで、その次が足芸。

紋附を着て袴はを穿はいて襷たすきをかけた娘が三人出て来て、台の上へ仰向きに寝て足でいろいろの芸をやる。それから力持、相撲のように太った女、諸肌脱もろはだぬぎで和藤内わとうないのような風をしているそ

の女の腹の上へ白うすを載せて、その上で餅を搗ついたり、その白をまた手玉に取つたりする。

道庵はそれを見ながら、与八を相手にあたりかまわず無茶を言つては、鮓すしと饅頭まんじゅうを山の如く取つて与八に食わせ、自分も食いながら、

「今度は、例の印度人の槍使いだな」

問題の印度人、書入れかきいの芸当。長い浮世に短い命、二度とふたたびは日本の土地で見られないと口上が言った。前にも後にも初めての舶来、看板でおどかし、呼込みで景気をつけ、次に中入り前に、ワザワザ時間を置いて勿体もったいをつけて、また改めて口上言いが出て、

「さて皆様、これよりお待ち兼ねの印度人槍使いの芸当……」  
前のに尾鱸おひれをつけて長々と、槍使い一代の履歴を述べ、さん



ざん能書のうがきを並べて見物に気を持たせておいて、口上が引込むと拍子木カチカチと、東口から現れたのがその印度人であります。

「なるほど、こりや黒ん坊だ、看板に偽りいつわは無えね」

見物はその異様な風采ふうさいでまず大満足の意を表します。なるほど背四尺一寸と看板に書いてあつた通り。手に持った槍、柄は真赤に塗つてあつて、尖さきが菱ひしのようになってゐる、それも看板と間違まちがひはない。身体からだは漆うるしのように黒く、眼ばかり光つて、唇くちばしが拵こしらへたように厚く、唇の色が塗つたように朱あかい、頭の毛は散切ざんぎりで縮ちぢれている、腰こしの周囲まわりには更紗さらさのような巾きれを巻まいてゐる、首には例の国王殿下から賜たまつたという金銀のメタルが輪わになつて輝きらいている、それもこれもみんな看板と同じこと。それが東口あかえから赤柄ひしやうりの菱槍ひしやうりを突ついて出て来る足許あしもとは、一步は高く一步は低いものであります。

「なるほど……あの足だな、あれがヒマラヤ山で虎に食われた足なんだ」

その跛足びつこがまた大喝采だいかっさい。

「イヨー、舶来の加藤清正！」

「虎狩りの名人！ 日本一！ 世界一！」

見物は喚わめく。

「先生」

「与八」

「看板の通りだね」

「看板の通りだよ」

やがて真中の土俵まで出て来た印度人、光る眼をギョロつかせて四方を見る。どんな心持でいるのだから、色が黒いから面かおの上へは情がうつりません。

「キーキーキー」

白い歯を剥むき出して、猿の啼なくような声を出して、左の手を高く挙げました。

「あれが向うの挨拶あいさつなんだね、日本でこんにはちはこのを、印度ではキーキーと言うんだらう」

「それに違えねえ」

印度人は、キーキーと言いながら、右の手には槍を持ち、左の手は高く挙げたまま、グルリと見物を一週ひとまわり見廻して正面を切ると、一心に見ていた道庵先生と期せずして面かおがピタリ合いました。

道庵の面をしばらく見詰めていた印度人。他目よそめには誰も何とも気がつかなくかつたが、印度人はブルブルと慄ふるえて、危なく槍を取落すところを、しつかりと持ち直して、わざとらしく横を

向きました。

「はて、おかしいぞ」

道庵先生もまたこの時首を捻ひねりましたが、

「何だね、先生」

「どうも、おかしい、あの印度人は見たことのあるような印度人だ」

「先生は印度人にも友達があるのかね」

「どうも、あの時より肉は少し落ちているが、骨組こつぐみに変わりはない、跛足びつこに申し分もなし、こいつはいよいよおかしい」

道庵先生は、慈姑頭くわいを振り立てて印度人の恰好かつこうを横から見、縦から見ていましたが、

「あはははは」

突然、大きな声で笑い出しました。

時々変なことを言い出すお医者さんと思つて、あたりの見物も気に留めなかつたが、この時は笑い方があまり仰山ぎょうさんであつたから、みんなが道庵の方を振向いて見ました。

「先生、何を笑つてるのだ」

与八も驚かされました。

「あははははは」

道庵はやはり大口をあいて笑います。

「何がおかしいだか」

与八は受取れぬ面かお。

「まず前芸と致しまして槍投げの一曲、宙天ちゆうてんに投げたる槍を片手に受け留める……」

口上言いが言う。

印度人が槍を取り直して、ヒューと上へ投げる。

「うまいぞ！ あはははは」

道庵先生が嘸はやすと、印度人はブルブルと慄えて、落ちて来た槍を危ないところで受け留める。手足にワナワナと顫ふるえが見えるのが不思議です。

「黒さん、しつかり頼むよ」

道庵先生に言葉をかけられるたびに、印度人がドギマギして、ほかの人が見てもおかしいと思うくらいに、槍の扱いがしどろになつてしまうから見物が、

「なんだか危なつかしい手つきだ」

幸いに面の色は真黒だから、表情が更にわからないけれど、どうも黒さんの調子が甚だ変なのであります。それでもやつと数番の槍投げを了おえて、

「次は槍飛び！」

口上がかかると、

「しつかりやれ、道庵がついてるぞ！」

道庵がまた大きな声。

槍飛びの芸当にかかるはずの印度人が、この時ふいと舞台から逃げ出しました。

「おい黒さん」

口上言いが驚いて呼び止める。それを耳にも入れないで、印度人は、槍を突いて跛足びつこを飛ばして楽屋がくやの方へ逃げ込みます。

「おや、黒さん、どうしたんだい」

口上言いや出方でかたが飛んで行って、印度人を連れ戻そうとするのを、印度人は頓着とんちやくなしに楽屋に逃げ込んでしまいます。

いよいよ本芸にかかろうとする前に、肝腎かんじんの太夫さんが黙つて逃げ出したのだから、

「どうしたんだ」

「怪おかしいな」

「急病でも出たのかな」

「ひよいと出て、ひよいと引込んでしまやがった」

「おかしな奴だよ」

「出方が追っかけて行かあ」

「あれ、楽屋へ逃げ込んでしまったぞ」

「どうしたわけなんだ」

「やあい、黒、どうしたんだ」

「黒！」

「黒ん坊！」

「早く出ろ！ 黒やあい」

見物は、ようやく沸き立ってきました。



「東西」

口上言いが、沸き立つ見物の前へ出て来て、

「ただいま、印度人が急病さし起りまして、暫らく楽屋に休憩とございます、なにぶん熱国より気候の違った日本の土地に初めて参りましたこと故……」

「あはははは」

口上の申しわけ半ばに道庵が笑う。口上は腰を折られて変な目をして道庵を見たが、また申しわけをつづけて、

「食当り水当りのために頭痛眩暈ずつうめまいを致し、なにぶん芸当相勤め兼ねまするにより……」

「その病気なら俺が癒してやる」

またしても道庵の差出口さしでぐち。

「当人病気休息の間、代って手品水芸の一席を御覧に入れまあ

する」

「馬鹿野郎」

見物が承知しませんでした。

「手品なんぞは見たくねえ、早く黒を出せやい、黒ん坊を出せ」

「新宿の八丁目から、わざわざ黒ん坊を見に来たんない」

はんじょう  
半畳が飛ぶ。

自分の楽屋へ逃げて来た印度人、楽屋にはお玉のお君が胡弓こぎゆうを合わせていました。

「どうしたの、友さん」

「駄目だ、駄目だ」

ここへ来ると印度人は楽な日本語です。

「まだお前、引込む時間ではないのだろう」

「いけねえ」

印度人は、お君の傍へ倒れるように坐つて首を振りました。

「どうしたんですよ」

お君は胡弓をさしおいて心配そう。

「ばれちやつた、ばれちやつた」

「まあ」

お君も安からぬ色。

「誰か、お前が印度人でないと言う人があつたの」

「うん」

「じゃあ何かい、お前が、宇治山田の友さんのお化<sup>ば</sup>けだということ、誰か見物が言ったの」

「そうは言わねえけれど、知っている人に見つかつちやつた」

「知ってる人？ それは誰」

「それは、俺らおいが世話になつたお医者さんだ」

「お医者さん？ 伊勢あちらのお医者さんかえ」

「いいや、いつかもお前に話したろう、俺らかくれが隠ヶ岡おで突き落されて、一ぺん死んだやつを生かしてくれたお医者さんだ」

「それでは、あの下谷の長者町にいらつしやるという先生かい」  
「そうだ、その道庵先生が見物に来ているのだよ」

「まあ、そりや驚いたね。それだつてお前、なにも心配することはありやしないよ、お前の方では道庵先生だとわかつて、先生の方ではお前が友さんだとわかるきづ気遣いはないからね。傍にきづいるわたしだつて、そう言われなければわからないのだから、心配しなくてもいいじゃないか」

「ところが駄目なんだ」

「わかちまつたのかい」

「なんしろ、俺の身体は頭の上に毛が幾本あつて、足の蹠うらに筋がいくつあるということまで、ちゃあんと呑込んでる先生だから、一目で見破られちまつた」

「そりや困つたね。でもね、先生は悪い方じゃないんだろう、だからここでお前を素破すつぱぬ抜いて恥を搔かすようなことはなさりや  
すまいから」

「そんなことはしねえ、素破抜きなんぞはやりやあしねえが、あはははと大きな声で笑う」

「そりや、知つた人が見りやおかしいだらうよ」

「そうして、『黒、しつかりやれ、俺が附いてる』なんと言うのだ、あの先生、酔つぱらつてゐるからね」

「何と言つたつてかまやしないじゃないか、怖こわいことはないだ  
らう」

「だってお前、俺らおいには気恥しくつてやつていらねえ」

「困ったねえ」

「俺らはもう印度人は廃業だ、親方にうまく持ちかけられて、お前までがやってみろと言うものだからこんな黒くなつてしまったが、今日という今日は、とてもやりきれねえ」

「困ったねえ」

「印度人は俺らの性しやうに合わねえ」

「困ったねえ」

この時、見物席の方で罵ののしり噪さわぐ声がかこまで喧けたたましく響いて来る。

「あれ、あんなにお客が騒いでいるじゃないか、お前が途中で引込んだからなのだろう、お客様はみんなお前を見たがつて来るのだからね」

「俺らはここへ寝てしまおう」

この印度人の正体が米友よねともであることは申すまでもないことで、米友は今、刺繡ぬいとりの衣裳などが掛けてある帳とばりの中へ入って寝込んでしまおうとすると、

「黒さん」

楽屋へ来たのは洗い髪ちゆうどしまの中年増。色が白くて光沢つやがある。

朱羅宇しゆらうの煙管きせると煙草盆とをさげて、弁慶縞おおがらの大柄おおがらに男帯をグ

ルグル巻きつけて、

「どうしたんだい」

背後うしろには屈強な若者が三人、控えています。

「親方、済まねえが……」

米友はこの年増を親方という。そうして済まねえと言って一目いちもく置く。

「済まないといったつてお前、あの通り、お客がわいてるじゃないか」

「ばれちやつたんだ、親方」

「ばれたつて？ 誰もそんなことを言やしなないよ、あの通り騒いでいるのはみんな、お前を見たがつて騒いでるのじゃないか、お前がイカサマだつていうことを、一人も言つてるものはないじゃないか」

「けれども親方、たつた一人、知つてる奴があるんだから、何とかしておくんなさい」

「なんと言つたつて駄目なんだよ、お前が出て挨拶しなけりや、お客は納おさまらないんだよ」

「では親方、病気だと言つて休ましておくんなさい、今日一日、休ましておくんなさい、今晚よく考えておきますから」



「困るよ、そんなことを言つたつて。あれあの通り、大騒ぎが始まつているじゃないか。それではお前、ちよつと出て挨拶しておくれ、病気で芸ができませんからつて、お前の面かおで挨拶をしなければお客様は納まらないんだよ」

「俺らは出るのはいやだ」

「いやだとお言いかえ」

お君はそれと心配して、

「友さん、そんなことを言わずに出ておくれよう、出て、なんとか言つておくれよう」

「うむ」

「さあ、早く出て行つておくれよう」

「うむ」

米友は、やつぱり進まないで、

「挨拶をしろつたつて、キーキーキーだけでは済むめえ、なんと言つていいか俺らにはわからねえ」

「なんとでもいいかげんに、印度の言葉らしいことを言つておくれ、そうすれば口上の方でいいかげんにごまかしてしまいうから」

「どうも俺らあ、もう気恥しくつてキーキーも言えなくなつた」

「あれさ、早く出ないと、あれあの通り土瓶や茶碗が降つてるじゃないか」

「弱つたなあ」

「早く出ておくれ、ね」

「親方、それじゃあね、俺らは一寸ちよつとばかり面かおを出してね、出鱈目でたらめを言うから、口上の方でごまかしておくんなさい」

「いいよ、呑込んでいるよ」

「それから親方」

「何だね、早くおし、相談なら後でゆつくりしようではないか」  
「俺らはここで挨拶したら、もう印度人は廃業だよ、黒ん坊は御免を蒙るよ」

「そんなことは後でいいから早く」

「ねえ君ちゃん、イカサマをやつて人の目を晦ますと、こんな思いをしなくつちやあならねえ、もう印度人には懲々だ」

「そんなことを言わないで早く」

「初めはちよつと出るばかりでいいと言うもんだから、お茶番をするつもりで印度人になってみたら、いつか知らねえうちに大看板を上げてしまつて、やれ虎を三十五匹殺したの、印度の王様から勲章を貰つたのと、いいかげんなことを書き立てて事を大きくしてしまやがつたから、俺らの引込みがつかねえ、そ

れでとうとうこんな目に会つちまった、ばかばかしい」

「そんな小言をこごとをいま言つたつて仕方がないよ、早く出ておくれ」  
親方の年増は、としまだますようにして米友をつれて行きました。

「先生、大へんな騒ぎになつちまったね」

与八は道庵に向つて言う。

「あはははは」

道庵は笑つている。

「何とも言わずに、黒ん坊が引込んでしまつたね」

「あはははは、俺を見たから引込んだのだ、俺の面かおに怖れをなして逃げ出したのだ。どうだ与八、おれの豪えらいことをいま知つたか、三十五頭の虎を退治した奴が、おれの面を見ただけで逃げてしまつた」

「冗談ばかり言ってる」

「冗談じゃねえ、こうして見ろ、黒ん坊が出ないために見物がわき出した、これで黒が出て来ればよし、出なければ小屋がひっくり返る、いよいよ事がむずかしくなった場合には、おれが行つて黒を引き出して見せる」

「それじゃ先生、あの黒ん坊とお前さんは知合いなんだね」

「なんでもいいから見ている」

「先生、印度の言葉がわかるのかね」

「わかるとも、印度の言葉であれ、オランダ和蘭の言葉であれ、ちゃん

と心得ている」

「豪いもんだな」

「いよいよ楽屋の方へ押しかけて行つたな、うまく黒を引っぱつて来ればいいがな。さあ、黒が来てなんと言うか、よく聞いて

いろ。このなかに印度の言葉がわかる奴は憚りながらこの道庵のほかには無え、なあに、楽屋のやつらだつて印度の言葉がわかるものか。出て来たら、奴の挨拶の仕様によつて、おれが一番、通弁をして見物のやつらをあつと言わせてやる、出て来なければ俺が迎えに行つて連れて来て見せる、俺が来いと言えば二つ返事で来る、もし病気だといえばお手の物だから俺が診察してやる、日本広しといえども、印度人の病気を見出すにはこの道庵より上手な医者は無え」

「先生、あんまり大きなことを言うと言物の人に撲られるよ」  
「なあに、大丈夫、おれは印度の言葉を心得ている、その上に印度人の病気を見出すことが上手だ」

「先生、出て来ましたぜ」

「やあ来た来た。黒、またやつて来たな、しつかりやれ」

「東西——」

口上言いと出方とが黒を引っぱって、場の真中へ出て来ました。黒は元氣のない歩きつきをして道庵の方を見るのが、鼠が猫を見るような態度であります。

黒が出て来たので見物は、やっと納まりました。

「いよう黒ん坊！」

「御見物の皆々様へ申し上げます、ごらんの通り色が黒うございますから、喜怒哀楽の心持が現われませぬ、どうぞこの足どりの萎しおれたところでごらん下さいまし、虎を手取りに致すほどの豪傑も、人間はすこぶる内気でございまして、子供のようなところがございます、ただいま腹痛がさし起りまして、とても芸当が致し兼ねると申して、皆々様にお断わりも申し上げず引込んで駄こ々を捏ねまするのを、ようやくのことで引き出して参

りました、今日はどうぞ、これにて御免を願ひ上げます、その代りと致しまして、明日は残らず芸当を取揃えて御覧に入れまする……」

口上言いがぺらぺら喋ると、聞いていた印度人の米友、その手を後ろからグイグイと引く。

「明日は間違いがございません……」

また手を引く。

「槍投げ、槍飛び、馬上の槍、水中の槍、綱渡りの槍、飛越えの槍、矢切の槍、鉄砲避けの槍……」

「嘘を言うな！ 明日はやらねえ」

「こら 泳え兼ねた印度人の米友、我を忘れて口上言いを力に任せて後ろへ引くと、口上言いは尻餅を搗く。」

「おや！」



見物は驚く。

「嘘だ！」

米友が喚く。わめ

「おや、あの印度人が日本の言葉を使つたぜ、そうして口上をひっくり返した」

見物はまた沸く。

「あはははは」

道庵先生が、また大笑いをする。

その晩に、お君と米友はこの見世物小屋を追ん出されてしまいました。

「友さん」

お君は泣き出しそうな面かおをして、三味線だけを小脇こわきにかかえ、

「お前は、あんまり気が短いからいけないのだよ」

「だって仕方がねえ」

米友は、この時はもう黒ではない。黒いところはすっかり洗い落されて、昔に変わるのちゃせんは茶筌おったを押立てた頭ざんぎりが散切ざんぎりになつただけのこと。身体からだには盲目縞めくらじまの筒袖めくらじまを着ていました。

「口上さんが申しわけをしている時に、あんなことを言い出さなければよかつたに、あれですつかり失敗しくじつてしまつたんだよ。それでも聞き咎とがめた人は幾人もなかつたからよいけれど、本当にとがばれた時には、それこそ小屋を壊されて、どんな目に会うか知れなかつたよ」

「あの時は、ついあんなわけで、口上の言草いいぐさが癩しやくに触るから」

「あたりまえなら、袋叩ふくろきにされた上に小屋ほらを抛り出されるのだけれども、お前が槍やりが出来るし、それに偽にせの印度人だという

評判が立つては悪いから、こうして黙って追い出されたんだというから、まあ仕合せだと思つていますよ」

「うん、俺おいらも、もうあんなどころにはいてくれといつたつて一日もいられやしねえ、ちようどいい幸いだ」

「だけれどあの親方は、そんなに悪い人じゃないよ。なにしろ女の身でもつて、あれだけのことを踏まえて行こうというんだから、なかなかしつかりしたところがあるねえ」

「そうだ、あの親方は、あれでなかなかいいところがあるよ」

「第一、俠おとしぎ気があるね。ほら、二人が三島まで来て、お金が無くなつて困つていた時に、あの親方に助けられたんだろう、わたしの三味線がいいから下座げざに使つてやると言つて、中へ入れてくれたから、お関所も無事に通ることができたんだよ」

「そうだ、それからとうとう、おれを印度人に化けさせやがっ

た。はじめの考えでは、俺おいらはあの道庵先生を頼おいつて行くつもりであつたが、途中で印度人に化けるようなことになつちまつた」

「これからどうしようね」

「どうしようと言つたつて、まあ今夜はどこか木賃きちんへでも泊つて、ゆつくり相談するとしてよう」

「あの親方が言うのにはね、君ちゃん、お前は一旦ここを出ても、気があつたらまた戻かへつておいで、どんなにも相談に乗つて上げるからと、出る時に親切に言いつてくれたのよ」

「俺らにはそんなことを言いわなかつたが、お前にだけそんなことを言いつたのかい」

「そうだよ、わたしにだけ内密ないしよに言いつてくれたの。江戸に居い悪にくければ旅へ出た時に、まだ仕事はいくらでもあるから、どこへ

か落着いたら居所いどころを知らせてくれと言つてくれましたよ。そうして今晚も泊るところがなければ、両国橋を渡ると向うに知合いの宿屋があるから、そこへ行つて親方の名をいえばいつでも泊めてくれると、その所や宿屋の名前まで、よく教えてくれましたよ」

「はは、それでは親方は俺らには愛想あいそうを尽かしたけれども、お前の方にはまだ見込みがあるんだな。お前またあすこへ行つてみる気があるのかい」

「そうですねえ、あの親方さんが親切に言つてくれるものだから」

「そうか……」

二人は両国橋を渡ります。夜風が吹いて川を渡るのに、見世物場では賑やかな燈火あかり。二人はこし方かたとゆく末を話し合つて、

後ろに跟<sup>つ</sup>いて来たムクのことを忘れていました。

二

「君ちゃん、俺らもようやく奉公口がきまつたよ」

米友が言つて来たのは、それからいくらもたたない後のこと  
でありました。

「そうかい、それはよかつたねえ、どんなところなの」  
着物を畳んでいたお君が莞爾にっこりしました。

「金貸しの家だよ、このごろ金貸しを始めた家なんだよ」

「金貸し？ お金を貸して利息を取る商売なの」

「そうだよ」

「金貸しは貧乏人泣かせで、罪な商売だというじゃないか」

「罪な商売かも知れねえが、俺らがそれをやるわけじゃない、俺らはただ奉公人なんだから」

「そりやそうさ。まあ、何でもよく勤めさえすりやいいんだらう」

「家の留守番をして、庭でも掃いていりやいいんだとき。俺らは片足が不自由だけれども力があるから、泥棒の用心にいいからって、それで雇われることになったんだ」

「そうだろうねえ、金貸しの家なんぞは泥棒に覘ねらわれるだろうねえ。家の用心もしなくちゃあいけないけれど、自分の身も用心しなくちゃいけないよ」

「大丈夫だ」

「それで家の人数は多いのかい、雇人はお前のほかにたくさんいるだろうねえ」

「うんにや、俺らのほかには飯焚めしたきが一人、そのほかによそから来ている人はいねえ」

「大へんにこぢんまりした金貸しさんだねえ、それでは家の者が多いのでしよう、息子さんだとか、娘さんだとか」

「それもずいぶん少ないのだよ、よく考えてみると、おかしな家だよ」

「おかしな家とは？」

「でも、主人というのは子供なんだからね、子供といつても十  
四か五ぐらいだ、それが主人で、そのお母さんともつかず姉さ  
んともつかない女が一人、その子は、おばさんおばさんと言っ  
ているが、その二人きりなんだ」

「その女の人と子供と二人で金貸しをしているの」

「うむ、そうだよ、代々やつているのかと思えばそうでもなく、



ほんの近頃はじめたらしいんだから」

「では、そのおばさんというのが、先の御亭主せんか何かが残しておいたお金をもつて、それを寝かしておくのも惜しいから、金貸しをして暮らそうとでもいうんだらう」

「そんなことだろうと思うよ。その子供がまた、ばかにマセた子供でね、主人気取りで、俺らを使い廻す気になっていて、うっかり坊ちゃんなんと言おうものなら、怖い眼をして睨むんだからおかしいや」

「その子供さんが番頭をするんだらうから、お前は番頭さんといえばいいじゃないか」

「番頭さんでも気に入らないんだ、旦那様と言わないと納まらないんだからおかしいやな」

「旦那様というのは少しおかしいね、十四や十五の子供をつか

まえて」

「けれども旦那様と言うことになったんだ。そうしてみると、俺らのはあのおばさんという人の方をなんと云つていいか、それをいま考えているんだ」

「その子供が旦那様では、まさか奥様とも言えないしね」

「そうかと言つて、まだお婆さんという年でもないんだ、やっぱり奥様と言つてゐるより仕方があるめえ」

「なんでもよいからその時の都合のいいようにお言い。それからお前、短気を出さないでよく奉公をしなくてはいけないよ」

「うまく勤まるかどうか。それにしても君ちゃん、お前の方はどうなるのだい、お前はあの軽業かるわざと一緒に旅に出る気なのかい」

「ああ、少しの間だから行つてみようと思うの、いつまでこう

していたつて仕方がないから、わたしもあの人たちのお伴ともをして旅に出てみることにしようと思うの」

「もう返事をしてしまったのかい」

「ええ」

「旅に出るのは危ないぜ」

「でも永いことじゃないから」

「どっちの方へ行くんだい」

「甲州とやらへ」

「甲州へ？」

「すぐ帰つて来ますよ」

お君は畳みかけていた着物を、また畳みはじめます。

「君ちゃん」

米友は、燈下に着物を畳むお君の姿を横の方から暫く眺めて

いて、思い出したように名を呼びました。

「何だえ」

お君は着物を畳みながら返事。

「お前は旅へ行く、俺らは奉公に行く、そうすると、また暫く会えないね」

「何だい友さん、そんなに心細いようなことを言つてさ」

「でも、暫く会えないじゃないか」

「暫く会えないには違いないけれど、お前の言うのはなんだか一生会えないような心細い言い方をするから」

「一生会えないかも知れないからさ」

「縁起えんぎでもないことを言つておくれでない、一生会えないなんて」

「それでも、なんだかそんな氣持がする、これつきり一生会え

ないような気持がする」

「またそんなことを」

「お前、その畳んでいる着物は、そりゃあの親方さんから貰ったんだね」

「そうだよ、ちようどわたしの身体に合っているから持つておいでと言つて、あの親方さんがくれたの、まだ一度ぐらいしきや手を通したことがないんだよ」

「綺麗な着物だね」

「それからお前、櫛くしだの簪かんざしだの、足袋から下駄まで、そっくり拵こしらえてくれたのだよ。なかなか金目かねめのもので、わたしたちが二年と三年稼かせいだからつて、これだけのものは出来やしない」

「お前、そんなにたくさん貰つて嬉しいかい、有難いと思つてるのかい」

「そりゃ誰だつて、こんなに結構なものを貰えば嬉しいと思ひますわ、嬉しいと思へばお礼の言葉も出るじゃありませんか」

「そうだろうなあ」

「ほんとうに、あの親方さんは親切な人ですよ、自分の妹のよ  
うに、わたしの面倒を見てくれますから」

「けれどもね、君ちゃん」

「ええ」

「あれは本当の親切ですと、お前は思っているのかね」

「本当の親切？……本当も嘘もありやしない、このせちからい  
世の中に、こんなにして下さる人が二人とありましようか」

「君ちゃん、お前は正直だから、なんでも人のすることを、す  
る通りに受けてしまふんだが、伊勢の拜田村にいた時はそれで  
いいけれど、江戸というところはそれでは通らないことがある

んだから」

「ホホホ、お前はおかしなことをいう、どこの国へ行ったって、人情に変わりというものがあるはずはないじゃないか」

「ところがなかなか、そんなわけにはばかりはいかないのだよ、俺らの身にしたらって、あんな約束ではなかったのだけれど、江戸へ来てみると、直ぐに真黒く塗られたのは、この通り洗えば落ちるけれども、君ちゃん、お前がもし真黒く塗られると、洗ったってどうしたって落ちやしないよ」

米友はいまさらのように自分の腕を撫でてみて、それから散切さんぎりになった頭の毛をコキ上げる。

「ホホホ、友さん、お前は今日はどうかしているね」

お君は無邪気に笑います。

「まさかわたしを真黒にして、印度人に仕立てるようなことも

ないでしょう、そんなことをしたつて、わたしでは見物が納まりませんからね」

「真黒にするというのは、そのことじゃねえんだ、お前の身体を真黒にしようと言うんじやねえのだ」

「どこが黒くなるの」

「はは、まだお前はそれが気が附かねえんだ、心が黒くなるといけねえんだ」

「心が黒くなる？　ばかなことをお言いでない、心なんていうものには色はありやしない」

「それはないさ、今のところお前の心には色がないんだから、それで大事にしなくちやいけねえ」

「友さん、お前は学者だから、心がどうだなんて言うんだろうけれど、わたしは学問がないからそんなことは知らないよ、黒



くなつたら洗えばいいじゃないか」

「洗つても落ちねえ」

「なんだか、お前の言うことはわからない」

「わからねえから、それで俺らは心配なんだ、黒くなると二度と洗い落すことはできないんだから」

「まだあんなことを言っている」

それで暫らく二人の無邪気な会話は途切とぎれたが、着物を畳んでいるお君の手は休まない。米友は両手で顎あごを押えて下を向いていたが、

「君ちゃん、どうだい、旅へ出ることをよしにしてしまったら」「ええ？ わたしに旅へ出るのを止めにしろって？」

お君は畳みかけた手を休めて、米友の方を向いて眼を円くする。

「そうしてくれると、いつまでも一緒にいられるんだ」

「そんなことを言ったつてお前、もう二三日でここに泊っている宿賃もなくなってしまうのに、お前は奉公に行くんだろう、とても二人一緒に過ごして行けることはできないじゃないか。それにお前、今になって急に行けないなんて、あれほど恩になった親方さんの前へ、そんなことが言えるものかね」

「それはそうだろう。それじゃあどうも仕方がねえから、行つておいで」

「情けない言い方をするねえ、もつと威勢よく力を付けて言つてくれなくちや」

お君はどこまでも、米友の言うことを気にしないで、いつもの通り軽くあしらつて、着物を畳んでいるが、米友はやつぱり浮かない面かおをしてしていると、破れ障子しやうじの裏で、ワン！

「ああ、忘れていた、ムクにまだ夕飯をやらなかつた」

米友は、あわて気味に頭を上げると、

「ああ、そうそう、かわいそうに、ムクにまだ夕飯をやらなかつたのね」

お君も面かおを上げる。米友は立って障子をあけると、縁側に首をのせて、ムクが尾を振って鼻を鳴らしています。

「ムクや」

米友は直ぐに台所から食物を持って来て、ムクに食べさせました。

「ムクや」

尾を軽く振って夕飯を食っているムク。それを見ながら米友が、

「ムク、俺おいらは明日から奉公に行くんだぞ、君ちゃんおいらは近いうち

旅へ出るんだぞ、俺らはお前をつれて行くことはできねえが……  
そうだ、お前は君ちゃんに附いて行け、俺らの代りに君ちゃん  
に附いて行け」

こう言つて米友の面が急に明るくなって、

「君ちゃん、君ちゃん」

「なに」

「旅へ出るにもムクはつれて行くんだらうな、ムクをつれて行つ  
ても親方は叱言こじごとを言やしないんだらうね」

お君は頷うなずいて、

「ああ、それはいいんだよ、ムクにはこれから芸を仕込むなん  
て、親方も大へん可愛がつてるから」

「それで安心した、行つておいで、行つておいで」

米友はホッと息をつきました。

米友が庭を掃いていると、木戸口をガラリとあけて入つて来たのは十四五の少年であります。子供のくせに気取つた容姿なりをして、小風呂敷を抱えた様子が、いかにもこまつちやくれていゝるが、よく見るとそれは甲州の山の中で金きんを探していた忠作でした。

「友造、誰も来なかつたか」

「へえ、誰も参りませんよ」

「ああ、そうか」

顚あごをしゃくつて忠作は家の中へ入つてしまうと、米友はそのあとを見送つて、

「ばかにしてやがら」

相変らず跛足びっこを引きながら庭を掃いていると、

「友造、友造」

奥の方で呼ぶ声がします。

「ばかにしてやがら、友造、友造と嘯んで吐き出すように言やがる」

「友造、友造」

「自暴やけになって呼んでやがる、返事をしてやらねえ」

「友造、友造」

「はははのはだ、友造がどうしたんだ、友造で悪けりや勝手にしろ」

「友造、友造」

「やあ、こつちへやって来るな、怒ってやがる、小餓鬼こがきのくせ

に金貸しなんぞをしやがって、生意気な野郎だから返事をしてやらねえ」

「友造、友造」

キンキンした声で怒鳴りながら奥から飛んで来る様子。

「隠れろ、隠れろ」

友造の米友は縁の下へそつと隠れました。

「おや、ここにもいない、友造、どこへ行つたんだ、友造」

「はははのはだ」

米友が縁の下で舌を出すと、忠作はその上で床板ゆかいたを踏み鳴らします。

「友造、友造」

「はーい」

縁の下から返事。

「縁の下にいやがる。何をしているんだ、さつきからあれほど呼んだのが聞えないのか」

「聞えませんでした」

「嘘をつくな」

「嘘じゃありませんよ」

「嘘でなけりや貴様は聾つんぼだ、跛足びっこの上に聾つんぼときては形かたなしだ」

「何だと」

「ナニ！ 主人に向つて貴様は口答えをするか、主人に向つていつもの米友ならばなかなか黙つてはいないのだが、今日は奉公人の友造、短気をしてはいけないということが、お君からのくれぐれもの饒別せんべつの言葉でもあり、せつかく仲人に立つてくれた道庵先生への義理でもあると、感心に辛抱しました。」

「どうも仕方がねえ、なるほどお前さんは主人だ」



米友——ここへ来てからは友造という名に改められたが、面つらを膨ふくらかして、御主人様のいうことを黙もくつて聞きいていると、

「馬鹿ひなし、日済を集めに行つて来い」

「へい」

「さつきと掃はいてしまつてこつちへ廻れ、よく呑込めるようにしてやるから」

忠作は障子を荒々しく締め切つて奥へ行つてしまいました。

「ちえッ」

友造は舌打ちをして、

「いやになつちまうな、また日済集めにやられるんだ。日済集めは俺らは大嫌だいきらいだ、ナゼだと言いえば、あの申しわけを聞くのがいやなんだ、そうかと言いつて思おもうように集まらねえと、あの小僧こぞうツ子の御主人様がガミガミ言いやがる、いやだなあ、いやだ

なあ」

友造は口小言を言つて庭を廻りました。

米友の友造が貸金を集めに行つたあとでも、忠作はなお一生懸命に算盤そろばんと首まゝつ引きをしているところへ入り込んで来たのが、まるまげまるまげ ちようかふうちようかふう丸鬚の町家風の年増でありました。いつのまに變つたか、これは妻恋坂つまこいざかのお絹であります。

「七軒町の小間物屋さんが申しわけに來たから、そんならそれでよいと言つて歸してしまいましたよ」

「歸してしまつたつて？」

忠作は渋面しぶめんをつくつて後ろを見返り、

「歸してしまつては困るじやありませんか、あの口は十五兩一分で貸してあるんですよ、今時いまどき、ああいう走りの金を、十五兩一分で融通するなんというのは格別の計らいなんですよ、それ

を有難いとも思わずに、待つてくれ待つてくれで、今日で三日目だろう、いいわ、いいわで帰してもらつちや困りますね」

「でも、あの人は氣前のいい人だから、ありさえすりゃあ返すんだらうけれども、無いから返せないのだらう、性の知れた人だから少しぐらい待つて上げたつていいだらう」

「これは驚いた、そんな了簡りようけんで金貸しができるものか。今度来たら私のところへ取次いで下さい、私が掛合うから。いや、そんな間まぬる緩いことをいつてはおられん、今晚にも私が出向いて行つて取つて来ますから」

「いいじゃあないかね、二日や三日は」

「いけません、そんな了簡では金貸しはできません」

「金貸しという商売も思ったより忙せわしい商売だねえ」

「忙しくつて結構、忙しくないようでは上つたりですよ。おか

げさまで、これごらんなさい、帳面尻ちようめんじりが鼠算ねずみざんのように殖ふえてゆく。どうです、おばさん、元金が利息を生み、利息がまた子を産むんですからね、その子がまた孫を産むんですから、ほうつておいてもメキメキと殖えてゆくんですよ。おばさんも少し算盤そろばんの勘定を覚えて下さい、利息の見積りなんぞを吞込んでおいてくれないと困る、私一人で朝から晩までやっているのも面白いけれど、おばさんにも少し覚えておいてもらわないと困ることがあるでしょう」

「使う方ならいくらでも引受けるが、儲もうける方は面倒めんどうくさい」  
「そうではありませんよ、その道へ入ってみるとこんな面白いことはない、なにしろ二十五両一分というのが利息の通り相場で、二十五両貸して月に一分の利息を上げる、それより上を取ってはならないことにお上かみできめてあるんだが、どうしてどうして、

裏はそんなものではない、十五両一分から十両一分、五両一分  
なんというのも珍らしくはないのですからね。それで向うが折  
入つて御無心ごむしんに来る、こつちが高くとまつて、それでいやなら  
およしなさいという腹でいると、背に腹は換えられないから向  
うが往生してしまふんでさあ、向うに働かしてこつちは懐手ふところを  
していて、うまい汁はみんな吸い上げてしまふ、こんな面白い  
商売はまたとあるもんじやない。これから追々大尽金だいじんがねというの  
を、はじめてみようと思つていますよ。大尽金というのは大身たいしん  
や金持の若旦那なんぞが、親や家来ないしよに内緒で遊ぶ金を貸すんで  
すね、これは思い切つて高い利息を取つて、そうして取りはず  
れのない仕事、ナニ、証文面しょうもんづらは御規則通り二十五両一分にして  
おくから、まかり間違つて表沙汰になつたところで、それだけ  
の金は取れるんだ。そんな心配はありませんよ、こつちが表沙

汰にしようと思つても、向うで折入つて来るから……」

忠作は帳面と算盤を見比べながら、ひとり悦えつに入るのを、お絹は面白くもない面かおをして、

「わたしの知つてる人が証人に立つから、百両融通してもらいたいと言つて来たがどうだろう、借主は両国で景気のいい見世物師だという話だが、証人が確かだから……」

「見世物師？」

「ええ、両国に出ていたのが今度、旅を打つて廻ろうというのに、仕込みや何かで金がかかるから、少しばかり借りておきたいと言うんですよ」

「なるほど、見世物師なんというものは、あれで当るとなかなか儲もうかるものだから都合して上げてもいいが……」

「今晚、また相談に来ると言つていたよ、よくその時に聞いて

みたらいいでしょう」

「向うの話ばかり聞いていても駄目、実地に行つて様子を見て、それから抵当かたになりそうなものを目利めききをした上で……」

「そんなら行つてごらん」

「ほかにも廻るところがあるから、夕飯が済んだら出かけましよう。両国はなんと言いましたかね」

「何と言つたか、わたしもよく知らない、名札なふだが置いてあつたはずだから見て上げよう」

お絹は氣のないように、これだけのことを言ひばなしにして、自分の居間へ帰つてしまいました。居間へ帰つてからお絹は、机もたに凭もたれてホツと息をついて、

「ほんとに厭いやになつてしまふ、あんな子供のくせに朝から晩までお金のこと、元金もとぎんがいくらで利息がいくら、それよりほかに

言うことはありやしない。あつちから来るときは賢そうな子だから、見処みどころがありそうに思つて、つれて来てなにかと世話をし  
てやろうと来て見れば、殿様は甲州勤番きんぼん、わたしもこれからど  
うして世渡りをしようかと戸惑とまどいをしていたところへ、どうし  
てあの子が聞き出して来たか、金貸しをすると儲もうかると言い出  
して、その利息勘定などを、わたし目の前へ持つて来て見せ  
るものだから、わたしも眼から鼻へ抜けるようなあの子の賢い  
のに感心して、それではまあ、やつてごらんとつて、それから  
あの子の持つていた金の塊かたまりと、わたしの使い残りのお金を資本もと  
にして、はじめさせてみると、調子はいいいにはいいが、ああ細か  
くなつて元金と利息のほかには眼がないようになってしまった  
のでは、末のことが思われる。このごろでは、コマシヤクれた  
厭がな餓鬼きだ、見るのも厭がになつてしまった。なんとかして、わ



たしはわたしだけのお金を持つて勝手に暮してゆきたい、そうしなくちゃ、ばかばかしくて仕方がない」

お絹は続いてこんなことを考えていました。

「今晚はどこへか出かけてやろう。それにしても困ったのはお金、いちいちあの子が勘定して封印をして、ほかの人には手もつけさせないようにしてあるんだが、ひとつ探してみてもやろうか。あとで文句を言うだろう。なるほどこうして置けば、お金はズンズン利に利を産んで殖ふえてゆくだろうけれど、遣つかえないお金では全くつまらない。よし、帰つて来たら、相談をして、わたしの取るだけのものは取つて別れてしまおう、わたしはその金で、一軒を立てて、お花のお師匠……もうそんなことをしてもいられない、いいかげんの相手があれば……と言つて、好いたらしいのは頼みにならないし、頼みになりそうなのは碌ろくでも

なし、どうしていいかわからない」

お絹は忠作をうまく使つて、番頭も小僧も兼ねた仕事をさせ、自分は蔭で好きなことをして面白おかしく暮そうという目算であつたのが、その事業はどうやら思うようにゆくが、お絹の目算は外れ、はず肝腎かんじんの金銭の出納すいとう、收支の自由は忠作が一手に握つてしまつて、一分一朱も帳面が固く、お絹がかえつて虚器を擁ようするようになってしまつたから、厭いや気がさしてたまらないのです。

#### 四

貸金を集めに一廻りして来た米友。

神田の柳原河岸やなぎわらがしを通りかかったのは、今で言えば夜の八時頃

でした。懐中ふとこには十両余の金があつて、跛足びつこを引き引きやつて来ると闇の中から、

「ちよいと、旦那」

呼ばれて足をとどめた米友の友造が、

「誰だ」

「様子のよい旦那」

闇くらいところから呼んでいるのは女の声。ちようどその時分、他に往来がとだえていたから、友造を見かけて呼んだものに違いないと思われます。

「俺おいらに何か用があるのかい」

「こつちへいらつしやいよ」

「お前はそこで何をしてるんだ」

「そんなことを言わずに、こつちへいらつしやいよ、ほんとう

に様子のいいお方」

「ばかにしてやがら」

「小作りで華奢きゃしゃなお方」

「ばかにしてやがら、小作りだろうと大作りだろうとお前の世話にやならねえ」

「ねえ旦那」

「用があるなら早く言いねえな」

「何を言ってるんですよ、用があるから呼んだんじゃないか」

「そんなら早く言つてしまいねえ、俺らはこれでも主人のお使先だ」

「まあ、ゆつくりしておいでなさいよ」

「大事の金を懐中に持つてるんだ、主人の金だから大事だ」

「お金？ 頼もしいわ、そんなに大事なお金なら暫らく預かつ

て上げようじゃありませんか」

「お前は俺らを調戯からかうつもりなんだな。女のくせに、この暗いところで、男をつかまえて調戯うとは呆あきれたもんだ、俺らだからいいけれども、ほかの男だと飛んだ目に逢あうぞ」

「あははだ、お前さんこの柳原の土手を初めて通るんだね」

「初めてなもんかい、これで三度目だい」

「三度目？ それでも夜になって通るのは初めてだろう」

「そりゃそうよ」

「そうだろうと思った、この柳原は昼間通るのと、夜通るのとは規則が違うんですからね。夜になってからこの通りを通るに、税金がかかることを知らないんだろう」

「税金がかかる？」

「税金をわたしに納めてからでなければ、通れない規則なんで

すからね」

「馬鹿野郎」

女がからみついて来るから、友造は面倒がつて逃げ出しました。逃げ出すといつても足の不自由な友造だから、早速には逃げられないで家鴨あひるのような恰好かつこうをして駈け出しました。女はそれきり追いもしないで、

「ホホホ、小柄こがらで華奢ぎやしやで、そうして歩あんよのお上手な旦那、またいらつしやいよ」

友造の逃げっぷりを立って見て笑っていました。息せききつて逃げて来た友造、

「ばかにしやがら、女でなければ、打ちのめしてくれるんだが」  
ようやくにして長者町の奉公先へ帰った友造は、御主人の居間へ行つて見ましたが、どこへか出て行つたらしく、暫らく待つ

ても帰る様子がないから、自分の部屋へ帰って一息ついて  
いる間に、疲れが出て、ついうとうとと寝込んでしまいました。  
翌朝になって、忠作の前へ呼び出された友造が、

「困ったなア」

「馬鹿」

忠作のために頭ごなしに叱られました。

「だから財布は、首へ掛けなくちやならんと言っておいたじゃ  
ないか、グルグル捲きにして懐中へ突っ込んでおくから、こん  
なことになるんだ」

「エエと、柳原の土手だ、たしかにあの時に落したに違えねえ」  
「柳原の土手でどうしたんだ」

「あの土手で女の追剥が出やがったから、そいつを追払って逃  
げた時」

「馬鹿、女の追剥というやつがあるか」

忠作は苦にがりきつて、

「ありや夜鷹よたかというものだ」

「なるほど」

「何がなるほどだ、その夜鷹に捲き上げられたんだらう」

「どうも仕方がねえ、もう一ぺん行つて探して来る」

「うむ、探して来い、出なけりや道庵さんに話して、せつかく

だがお前に暇を出すから、そのつもりでしつかり探して来い」

昨晚、十両余りの金をいつどこへ落したとも知らずに落して

しまったが、その晩は疲れて寝込んだから、今朝まで気がつき

ませんでした。いざ御主人忠作の前へ並べようとしてみるとそ

の金が無いので、米友も色を変えてしまった、というわけで、

思い当るのは昨晚の柳原へ出た奇怪な女の振舞ふるまいであります。そ



の辺に少し出入りをしたものは、誰でも知っているはずの夜鷹です。それを米友はまだ夜鷹と知らないでいるのに、忠作はまた、友造が夜鷹にひっかかって捲き上げられたとばかり邪推して、金が出なければ米友を追い出すことに了簡りょうけんをきめているらしい。

「弱つたな」

跛足を引き引き柳原の方を差して行く。柳原へ行つてみたところで、あの女が取つたものならば、出て来るはずはないし、落したものならもはや拾われてしまっているはず、こうと知つたらあの女の面かおをよく見ておけばよかつたものと、米友はいまさらに悔くやみます。悔んだところで、暗いところから出て来たものだから面の見様もなかつたし、ただ声に聞覚えがあるといえ

ばあるのだが、それだつて別段、耳に立つほどの声でもなかつ

たから、声だけでは、いま眼の前へその女が現われて来たところ  
でわかるうはずはありません。

「小作りで華奢で、歩あよのお上手な旦那と言やがった、ばかに  
してやがら」

米友は昨晚の女の言草いぐさを思い出して腹を立てました。そんな  
に冷かされては米友だつて腹の立つのは無理もないようなもの  
だが、それよりも、人の懐中物を奪おうとするような性質たちのわ  
るい女が江戸の市中に徘徊はいかいしているかと思えば、それが憤慨に  
堪えないのです。

「向うでは知つてるだろう、向うでは、俺おらの歩きつきまで見  
ているんだから、俺らが柳原を通れば、もしあの女が正直な女  
でありさえすりゃ、拾った金を返してくれるにきまつているが、  
夜鷹でもするくらいかおの奴だから、拾ったところで知らん面をし

ているにきまつてる、そうになると、俺らはまたあの家を追出さ  
れるんだ、どつちへ行つてもホントに詰らねえ」

米友は且つ憤慨し、且つ悲観してしまつて、柳原の昨晚騒ぎ  
のあつたところまで来て見たけれども、河岸に材木が転がつて  
いたり葭簀張よしずばりがしてあつたりするくらいのもので、別段そこに  
人が住んでいる様子もないし、「ちよいと、様子のよい旦那」と  
言つて呼びかけるような女の気配も見えないから、ポカンとし  
て立ち尽していました。

十両と少しの金を尋ね出さなければ、米友は御主人の家へ帰  
ることができないのです。

神田と浅草の方面をあてもなく歩き廻つていたが、当あてのない  
ことはどこまで行つても当がないから、一ぜん飯を食べて腹を  
こしらえて、再び柳原通りの和泉橋いずみばしの袂たもとへ戻つて来ました。

「詰らねえ」

この時、後ろの方から塵ごさのような巻いたものを抱えて、三人連れの女がやつて来ました。その三人の女をよく見ると、その一人は手拭を被かぶらないで、頭の上へ御幣ごへいのような白紙を結んでいます。その白紙がひらひらと河岸の夕風で踊っているところが、なんとなく目につきました。

「ちよいと旦那」

呼びかけられて米友は、眼をパチパチしました。

「もし、小柄で華奢なお方」

「ナニ」

米友は、たしかに聞いた声だと思いました。

「何をそこで考えているんですよ」

「少し探し物があるんだ」

「おや、探し物？」

と言った女は、ズカズカと米友の傍に寄つて来ました。

「そこに突立つていたつて、探し物は出て来やしませんよ、歩いてごらんさい、小柄で華奢で歩あんよのお上手なお方」

「おや、お前は……」

「探し物というのはお金でしょう、鬱うこん金の財布に入れたお金のことでしよう、それをお前さんは探しておいでなさるんでしよう」

「それ、それだ」

「そんなら御心配なさいますな、ちやあんとわたしが預かつてありますから」

「あ、そうか、それはよかつた」

米友はホツと安心の胸を撫で下ろすのを、女は笑つて、

「意気地のない人だねえ、女を見て、あんなに逃げなくつてもいいじゃないか」

「うむ」

「お前さんの逃げっぷりがあんまりおかしいから、あとを暫く見送っていましたのよ、そうすると、足許あしもとに落ちていたのが財布、手に取って見た時分には、もうお前さんの姿が見えなかつたから、少しばかり追いかけてみたけれど、どちらへおいでなすつたか分らなかつたから預かっておきました」

「有難う、あれは俺らの金じゃないんだ、主人の金なんだから」  
「念のために、わたしは中をよく調べておきました、そうしてすぐにお係りへ届けようと思つたけれど、そうすると面倒になるし、仲間の者に見せれば、すぐに使われてしまいますから、見てごらんさい、こんな細工さいくをしましたのよ、わたしの頭の上

の仕掛しかけを」

女は御幣のような白い紙きれの片がひらひらしている頭を、米友の前へ突き出して、

「お前さん、この白い紙を取って頂戴、お前さんに取らせようと思つて、わたしがワザワザこんなことをしたんだから。わたしがこんなことをしておいたのは、もしやお前さんが、お金を失くして探しに来やしないかと思つて、その時の目印なんですよ。暗いところだからお互いに面付かおつきがわかるんじゃない、わたしの方では、お前さんの小柄なのと、歩きつきのお上手なのに覚えがあるんだけど、お前さんの方ではわたしがわかるまゝと思つて、その目印にこの紙を頭に附けたんだから、この紙をお前さんに取つてもらえば本望ほんもうというものだよ」

「ああ、そうか、俺らはさつきから、何のためにお前がそんな

紙きれを頭へ結ゆわいつけているのかわからなかった」

「こちらへおいでなさい。今いう通り、人に知れると面倒になるから誰にも知れないように、わたしがよいところへそつと隠しておいて上げたのだから」

女は米友を土蔵の裏へ引っぱって行つて、河岸の水際みずぎわまで米友をつれて来た時に、

「その石を転ころがしてごらんなさい」

「あ、これだ、これだ」

石を転がすとその下にあつたのは、まさに自分の持つていた財布。

「早く持つておかえりなさい、それがために御主人を失敗しくじるよ  
うなことがあると、お前さんもまだお若い人だからためになら  
ないから。そうして、これを御縁にまた遊びにおいでなさいよ」



「お前さんの家はどこで、名前はなんというんだ、改めてお礼に上らなくちやならねえ」

「わたしの家？ そんなことはどうでもようござんすよ、お礼なんぞはいけません——名前だけは言いましよう、お蝶というんですよ。ここへ来て、今時分、お蝶お蝶といえ、大概お目にかかれますわ」

五

落した金をお蝶という夜鷹よたかの女から受取った米友は、不思議な感じに打たれます。

売女ばいじよのうちでもいちばん卑いやしい夜鷹、二十文か三十文の金で、女のいちばん大切な操みさおを切売りする女、この女は十両の金が欲

しくはないのだろうか、取つても隠しても罪にはならない十両の金は大事に預かつて、返しても返さなくても知れるはずのない人へ返してやる、そうして掛替えかけがのない大事な操は二十文三十文の金に替えて惜気おしげがないということが、とにもかくにも不思議です。

不思議に思いつながら長者町へ帰つて来て、主人忠作の家へ来るには来たが、厭いやな厭いやな気持ちに打たれてしまいました。もう一足もこの家へ足を入れる気にはなりませんでした。なんらの理窟もなしにこの家が厭で厭でたまらなくなりました。

「金は持つて来たぞ、そうら、たしかにお返し申すぞ！」

米友は大音を揚げて財布ぐるみそつくりと格子戸こうしどの中へ投げ込むや否や、物に逐おわれるように一目散いちもくさんに逃げ出して来ました。跛足びっこの足で逃げ出しました。

「またも忠作の家を追ん出てしまった米友は、どこをどうブラブラ歩いて来たか、やがて下谷の山崎町の太郎稲荷のところまで来てしまいました。そこへ来ると、門前に黒山のように人がたかっています。」

「貧窮組が出来たんだ、貧窮組」

米友が社前をのぞいて見ると、大釜が据えてあつてそれでお粥かゆを煮ています。世話人のような威勢のいいのが五六人で、そのお粥の給仕をしてやると、群がり集まつた連中がうまそうに食っています。切溜きりだめの中には沢庵たくあんや煮染にしめや、さまざまのお菜かずが入れてあります。

「有難え、貧窮組が出来た」

その大釜からお粥を貰つて食べている人を見ると、貧乏人ばかりではないようです。乞食非人の体ていの者などは一人もいない

で、小さくともみんな一家を持つているような人間ばかりですから、米友も変に思つて見てみると、しまいには給仕をしていた世話人らしいのが、そのお粥かゆを食いはじめます。そうすると、今まで食べさしてもらつた貧窮人が、今度はかわりあつてお給仕をしてやつているから、米友はいよいよ変に思つて、

「施ほどこしをするんだか、されるんだかわからねえ」

と言つてる口許くちもとへ世話人が、お粥の碗を持つて来て、

「さあ食いねえ、貧窮組」

米友は煙けむに捲かれてそのお碗を手に取りました。あとからあとからとやつて来る連中、見れば必ずしも食うに困るような貧乏人のみではないと見えるのが、

「貧窮組が出来たそうで、どうかお仲間にしていただきとうございます」

お粥を貰つては食べ、食べてしまふと給仕方に廻る。誰も少しも遠慮をするでもなければ、お礼を申し述べてもないから、米友も調子に乗つてそのお粥を食べてしまいました。腹のすいている時だから、うまい。ペロリと一杯を平らげた時、またお代りを世話人が鼻先へ持つて来てくれたから、それもペロリと平らげてしまいました。とうとう四杯まで、米友がそのお粥を平らげてしまつて沢庵をかじつてしていると、

「さあ、これから広小路へ押し出すんだ」

この連中が雪崩なだれを打つて太郎稲荷を押し出したから、米友もそれと一緒にびっこなつて跛足を引きます。

「貧窮組」というのもおかしなもので、誰がもくろんで、誰がおだて煽動たともないうちにこうして大勢が集まつて、町内から町内へと繰込んで行くのです。物持の家へ行つては、米とお菜と金

を貰つて、それでお粥をこしらえて食います。それを食つてしまふと、また鬨とぎの声を上げて次の町内へ繰込みます。こちらに一組出来ると、あちらに一組出来ます。けれどもおかしなことには、別にそれが乱暴を働くというのではありません。ただこうして町内から町内を食つて歩くだけのことらしいのです。それに江戸名物の弥次馬やじうまが面白がつてくつついて飛び出す。出ないと幅はばが利きかなくなつたり憎まれたりするから、表通りの商人までがこの貧窮組へ飛び込んでお粥の施しを受け、いっぱしの貧窮人らしい面かおをします。

この連中が、昌平橋のところへ来て、町角へ大釜を据えまして。誰がどこから持って来たか荷車が二三台、米とお菜がたくさんに積んであります。そうすると川の向うとこちらから、貧窮人が真黒くなつて押し出して来ました。

しかしながら昌平橋で貧窮組と別れた米友は、ひとり柳原河岸へやって来ました。

「お蝶さん」

「だあれ」

米友に呼ばれた夜鷹のお蝶は、土蔵の裏から出て来ました。

「あら、お前さんはお金を落した人」

「お蝶さん、俺おいらはお礼に来たんだ」

「お礼なんぞ……」

「お礼と云ったところで、何も土産みやげを持って来やしないよ、俺らは主人の家を追おん出でちまったんだから」

「まあ、追い出されたの」

「追おん出でされたんじゃない、追おん出でたんだ」

「どうして追おん出でたの」

「自分から出ちまつたんだ、あんまり癩しやくにさわるから出ちまつたんだ、お前さんに拾ってもらった財布を家の中へ叩き込んで、それつきりで家を追ん出ちまつたんだ。それだから、今の俺らは一文無しで宿なしよ。お前さんにはお礼をしなくちゃ済まねえのだが、そういうわけで、せつかくお金を拾ってもらったが、お礼をすることができねえんだ。けれどもね、黙つていちゃ悪いから、口だけで、お礼を言いに来たんだ。また俺らがどこか奉公口が見つかつて、小遣こづかいでも出来たら改めてお礼に来るから、悪くなく思ってもらいてえ」

「まあ、お前さんはなかなか感心な人ね、その心持だけでたくさんよ。けれども、旦那の家をムカツ腹で飛び出すなんて、それはお前さんが若いからよ、思い直して、お詫わびをしてお帰りよ」「いやなことだ、いやなことだ」



「一国いちこくな人だねえ。そうして、これからどこへ行くつもりなの」  
「どこへ行くといつて当あてはないんだ」

「どうもお前さんは、口の利きつぷりやなにかがおかしな人だよ、心持に毒のなかりそうな人だよ。ほんとは行くところがなければ、わたしの家へおいでなさいな、親方に話して上げるから。わたしの親方の家は本所の鐘撞堂かねつきどうしんみち新道にあるのよ」

六

福士川から徳間とくま入りをした宇津木兵馬と七兵衛は、机竜之助を発見することなくして、かえつてが、んりきの百蔵を発見してしまいました。

「兄い、気をしっかり持たなくちゃいけねえ」

「あッ、抜いちゃいけません、先生、お抜きなすつちやいけません、抜いてしまつちや納まりがつきません」

が、ん、り、き、は、引、続、い、て、囁、言、ば、か、り、言、つ、て、い、ま、す。  
うわごと

この山入りでは、僅かにが、ん、り、き、を、得、た、だ、け、で、山道をもとの通りに下つて、一行はまた富士川の岸に出ました。

富士川をのぼる舟は追風を孕おいてんだ時はかえつて、下る船よりも速いことがあります。富士からこの船に乗った兵馬と七兵衛とが、ん、り、き、と三人は、早くも甲府に着きました。

机竜之助のいるところはかの白根しらねの麓。こうしているうちに秋も闌たけてしまつて、雪にでもなつては道の難儀が思いやられる。兵馬は心急がれていたけれども、名にし負う山また山、相当の用意なくては入ることのできないところであります。

甲府の南の郊外にある一蓮寺いちれんじというのは遊行念仏ゆぎようねんぶつの道場で聞えた寺。

おりからその鎮守ちんじゆにお祭りまつりがありました。

「江戸名物、女軽業大一座おんなかるわざおおいちざ」——本堂の屋根よりも高く幕張まくばりを

した小屋。泥絵具どろえのぐで描いた看板の強い色彩。高いところへ登つ

て片足を撞木しゆもくにかけて逆さにぶらさがっているところ、袴かみしもを着

て高足駄さんぼうを穿いて、三宝を積み重ねた上に立っている娘の頭か

ら水が吹き出す、力持の女の便々べんべんたる腹の上で大の男が立白たちうすを

据えて餅を搗く、そんなような絵が幾枚も幾枚も並べられてあ

る真中のところに、

「所作事しよさごと、道成寺入相鐘どうじようじりあいのかね」——怪しげな勘亭流かんでいりゅう、それを思い切つ

て筆太に書いた下には、鱗うろこの衣裳いしやうを振り乱した美しい姫、大鐘

と撞木と、坊主が数十人、絵具が、ベトベトとして生なまな色。

そのあたりは押し返されないほどの人混みの中へ、一人の身扮みなり卑しからぬ武士が伴をつれて割込んで来ました。

頭巾ずきんこそ被っているけれども、これは紛れもなく神尾主膳まぎの微行姿しのびすがたであります。

「ははあ、江戸名物女軽業大一座」

神尾主膳もまたこの絵看板を打仰ぐと、

「評判でござりまする、女というので評判なのでござりまする、太夫から下座げざに至るまでみんな年頃の女、それが評判で、ごらんの通り大入りを占めておりまする」

草履取ぞうりとりが説明を申し上げると、

「なるほど、ともかく江戸から出て来たものに違いはなからう、見物して参ろう、跟ついて来い」

木戸口に立つと、

「どうやら御重役のお微行らしい」

木戸番が頭取とうどりに耳打ちをしました。

この軽業の一行は両国に出ていた一行。米友を黒ん坊に仕立てた一座。女の軽業かるわざ足芸あしげいの類は多くは前の通りで、新たに加わったお君が「道成寺」を出すということが人気でありました。

「君ちゃん、御鼻ごひいき貞まことがあるよ」

楽屋ではお角かくが長い煙管きせるから煙を吹いて、

「着物を着替かえて面かおを直したら、ちよつと御挨拶ごあいさつに行つておい

で。正面の棧敷さじきに頭巾かぶとを被つて、お伴ともの衆しゅうと一緒に見物けんぶつしてお

いでなすつたあのお方かたさ、お前まへさんでなければならぬとおつしやるんだよ、早く行つて御機嫌ごきげんを取結とんでおいで。ザラにあ

るお侍さむらいさんとは違ちがつて、ことによつたら御城代ごしろだい様か御支配ごしはい様あ

たりのお微行しのびかも知れないよ。早く行つておいで、柳屋に待つていらつしやると御家来衆がお沙汰に来て下すつたんだから」  
「お伺いしなくては悪いでしょうか、誰か代りに行つてもらいとうござんすねえ」

「そんなことはできません、お前をお名指しなんだから」

「それでも親方さん、お酒を飲めの、泊つて行けのと御冗談をおつしやると、わたしにはお取持ちができませんからね」

「いい時分にはこつちから迎えにやりますから、安心して行つておいでなさい」

「お鶴さんか、お富さんが一緒に行つて下さるといいけれど」

「あの人たちは、まだこれから芸にかかるんだから身体があいてないよ」

「このまんまでは失礼でございますね」

「男衆の手もすいていないし、わたしが、ちよつと島田に纏まとめて上げよう」

「済みません」

「どうせ碌ろくなこととはできやしないけれど、手つ取り早いのでは若い時から自慢なのよ」

鏡台の前でお角は、お君の真黒な髪を梳すきながら、

「君ちゃん、お前の毛はよい毛だねえ、こうして捫つかんでいると

指が染まりそうだよ。そうしてお前さんには島田がいちばんよ

く似合つてよ、もう二三年すると丸鬚まるまげが似合うようになるだろ

う。わたしもお前さんを、いつまでもこんなところへ置くのは

惜しいと思つてるんだよ、だから早くなんとかして上げたいと

思つてゐるんだから、そのつもりで稼かせいで下さいよ。そのうち

容貌望さきりようのぞみで玉たまの輿こしというようないともないとは限らないから、

くだらないものにひつかからないように。口上言いや折助おりすけなんぞが、いくら色目を使つても、白い歯は見せちやいけないよ。その代り、身分と身上しんじょうの確かな人であつたら、年の違いや男ぶりなどはどうでもよいから……」

こんなことを言いながら親方の女は、見ているまにお君の島田を結ゆい上げてしまいました。

「それでは行つて参ります」

「ああ、行つておいで」

親方の女は、また煙草を吹かしながら、自分が結んでやつた島田てぎわの手際を、自分ながら惚々ほればれと見ています。

「なんだか一人ではきまりが悪い、親方さん、あのムクを連れ行つてもようござんしよう、わたしはムクを連れて行きたい」

「ムクを連れて行く？　ムクはこれから梯子はしご登りをするんじや



ないか」

「それでも、ムクを連れて行きとうございますわ」

「子供のようなことをお言いでないよ、ムクの梯子登りと火の輪くぐりは呼び物になっていて、あれで一枚看板の役者なんだから、抜くことはできませんね」

「それでは、ムクの芸が済みましたらば、ムクをわたしの迎えに柳屋までよこして下さいな、ほかの方が来て下さるのもよいけれど、ムクをよこして下さいな、なおわたしは有難いと思えますわ」

「それは芸が済みさえすればムクを迎えに出してやりますよ。それから、三味線を忘れずに持つておいで、お客様にお好みが必要ならばそれまでだけれど、持つて行つても邪魔じやまにはなるまいから」

そう言われてお君は、手慣れた三味を抱えて小屋の裏を出ました。ちようど、空が澄んで月が出ていました。

時は秋の末でも、小屋の中の蒸暑い空気から外へ出てみると、ひやりと身に沁しみる寂しい心。三味を抱えて客に招かれて行くわが身の影を見ると、間あいの山やまの過ぎし昔が思われます。故郷を出でて身はいま甲州の山の夜の露。わずか三月とはたたぬ間に変れば変わるものかな。それにつけてもムクを連れなのが、なんととも言われず心細くてたまりません。古市ふるいちの大樓へ招かれては、夕べあしたの鐘の声を古調で歌って聞かせる時、追つても叱つてもムクばかりは離れることもなかつたのに、今宵こよい他郷で久しぶりに、三味を抱えて月にうつるわが影が、たった一つであることが悲しくなつてハラリと涙をこぼします……ムクは死んだわけでも殺されたのでもなんでもなし、つい呼べば来ると

ころにいるのだけれど、お君は昔を思い出したからつい泣いてしまいました。

七

「役割、やくわり今日は一蓮寺のお開帳に行ってみようじゃござんせんか」

金助といって小才こさいの利く折助。

「そうよな、たびたび呼出しを受けてるんだから行ってみてもいい」

役割の市五郎は、金助から誘われて一蓮寺へ出かけてみようという気になったのは、一蓮寺の祭の夜は大きな賭場とばが開けているからです。

「お伴ともを致しやしよう、お伴を致しやしよう」

二人は相携えて城内から一蓮寺をさして出かけました。

「神尾の殿様にも困りものでございますな、ああなると手が附  
けられませんからな」

金助がいう。

「むむ、まったく困りものだ、甲府勝手へ廻されたのを自暴やけで、  
ああしておいでなさるんだから、何をするか知れたものじゃね  
え。金公、お前めづめからず目附めつけをしていてくれねえと困る」

「へえ、承知でございます、お頼まれ申した通り、神尾の殿様  
のなさることは一から十まで、わつしが方へ筒抜けになつてい  
ますから、今日なんぞも一蓮寺の和歌うたの会へお出かけなさつて、  
まだお帰けえりのねえことまで、ちゃんと心得ているのでございま  
す」

「そうか、大将もう一蓮寺へ出かけているのか。では向うへ行つて、変なところであつかるかも知れねえ。金公、ここいらで一杯飲んで行こう、中へ入ると落着かねえから」

市五郎が先に立つて、金助を柳屋というのへ引っぱり込みました。

この別室には、問題の神尾主膳がお君の来るのを待っているとは知らないで、二人はそこで一杯飲むことになりました。

「どうもおかしいぞ、あすこにともま供待ちをしているのは、ありやたしかに神尾のぞうりとり草履取」

金助は手を洗いに行つてから、席へ戻つてこう言いました。

「それじゃ神尾がここへ来ているのだろう、どこにいるか当つてみねえ」

「よろしうございますとも」

金助は得意の腕を見せるのはこの時だと思つて、

「それでは役割、ここは拙者が引受けますから、お開帳の方へは一人でお出かけなすつておくんなさいまし」

それとは知らず別の座敷で神尾主膳は、

「苦しいない、お君、初対面ではあるまいしなじみ馴染の上のそのほう其方、遠慮は要らぬ」

馴染と言われてお君は思わず面かおを上げました。しかし、どう思ひ返しても、こんなお侍に馴染と呼ばれるほど、ひいき鼻屑ひいきにされた覚えはありません。

「お前の方で見覚えのないのも無理はない、こちらではよく覚えてゐる。伊勢の古市の備前屋でお前の面を見て、よく覚えてゐる。珍らしいところで会つたからそれで昔馴染のような気が

してツイ、そちをここへ呼んでみる気になつたのじゃわい」

「まあ左様でございましたか、伊勢の古市で……」

そこでお君も思い当る。思い当たつたけれども、古市で呼ばれた客の数は多数であります、このお侍がそのうちのドノお客であつたかといふことは、お君の記憶に残つていませんでしたけれども、あの時分に鼻肩を受けたことのあるお客とすれば、やっぱりそれでも昔馴染。

「それとは存じませず失礼を致しました、お忘れなく御鼻肩下されまして、かさねがさね有難う存じまする」

「それでよろしい、ここへ来てさかすき盃を受けてくれ、そして久しぶりであの間の山節をまた一曲聞かせてもらいたい」

「恐れ多うございますからこちらで」

「なぜそのように遠慮をする」

敷居より内へは入らないお君、それをもどかしがつて神尾主膳は畳を叩く。

「あの、お座敷では恐れ多うございますから、お庭先で御機嫌を伺った方が、手前の勝手にござりまする、あの古市で致しました通り、このお庭で御挨拶を申し上げましょう」

「なるほど、古市では座敷へ上らずに、庭へ<sup>むしろ</sup>蕙を敷いて聞かせてくれたな。しかしそれはあの土地の慣例<sup>しきたり</sup>であろう、ここへ来てまでその慣例を守ろうとは愚かな遠慮<sup>おろ</sup>」

その時に、この庭の石灯籠の蔭で人の気配<sup>けはい</sup>がするのを、神尾主膳は早くも見咎<sup>みとが</sup>めました。



金助と離れた役割の市五郎は、ひとりで、例の女軽業の見世物小屋の前までやって来ました。

「なるほど、これが評判の女軽業か、ひとつ見てやろう」

懐手ふところをしてヌツと、木戸番の前を通り抜けようとして木戸を突かれました。木戸番も役割とは知らなかったものか、それとも知つていながら面つらが憎かつたものか、とにかく、市五郎がヌツと懐手で中へ入ろうとするのを押えてしまつて、

「旦那、お銭あしをいただきます、木戸銭をお払い下さいまし」  
と言つたから市五郎納まらないうで、

「やい、面つらを見て物を言え」

ウンと木戸番を睨みつけましたが、木戸番とはいえ、多少江戸ッ児の気風を持つていたものと見え、肝腎かんじんの市五郎の面かおを見てかえつてフンと笑つてしまいました。

市五郎にとつては容易ならぬ侮辱おじよくですから、ムカツと怒つて、ポカリと一つ木戸番の横面よこつらを撲りつけました。

「この木偶でくの坊ぼう、ふざけた真似をしやがる」

木戸番は飛び下りて、市五郎の横面を撲り返しました。

「この野郎、俺を見損みそこなつたな、俺は役割だ、城内の役割だぞ」  
「役割だか薪割まきわりだか知らねえが、あんまりふざけた野郎だ」

木戸番と役割とがここで組打ちを始めてしまうと、最初からこの近いところにいた口上でかた言いや出方でかたや世話役の連中、これもあんまり市五郎が横柄おうへいで乱暴だから飛んで来て、

「おい、役割さんだというじゃないか、役割さんを撲つてはいけねえ」

仲裁するふりをしてポカリと撲ります。

「役割さんに失礼をしては済まねえ、八公、謝罪あやまつてしまいな」

と言つてまたポカリ、ポカリと撲ります。

「薪割ならばいくら撲つてもいいけれど、役割さんを撲るようなことがあつては、後で申しわけがないから早く手を放したり」と言つてはポカリ、ポカリ、ポカリと撲ります。

「役割を撲るのはよくねえ、役割を十八も撲るなんてそんなことがあるものか、せめて十三ぐらいにしておけ」

続けざまにポカポカと撲りました。木戸の前にいた見物も、どちらかといえば見世物側に同情があつて、市五郎の<sup>おおづら</sup>大面を憎がつていたのですから、そうなると面白がつて、

「お前方は役割を撲るなんて、飛んでもないことをする、まあ俺たちに任してくれ」

と言つては市五郎をポカポカと撲る。気の毒なのは市五郎で、ポカポカと八方から<sup>こぶし</sup>拳の雨を蒙つて、<sup>はんしはんしよう</sup>半死半生の体<sup>てい</sup>にまで<sup>ふくろだた</sup>袋叩

きにされてしまいました。

「覚えていやがれ、役割の市五郎に、よくも恥をかかせやがったな」

役割が撲られたという噂うわさが八方へ散ると、ちようどその辺の賭場とばやなにかに集まっていた多数の折助が、それを聞きつけたからソレと言つて飛び出して来ました、それで事が大きくなりました。

折助連中といえども、そう役割ばかりを有難がつているものはない。なかには市五郎がテラを取つたり頭を刎はねたり、自分ばかり甘い汁を吸つて、こちとらにはケチで、そのくせ、いやおおもものに大物ぶつているのを面憎つらにくがつているのもあるのですから、市五郎がここで撲られたことをかえつて面白がつて、都合によつては自分も大勢と一緒に袋叩きの方へ廻ろうという連中もない

ではないのですから。事情を聞けば、騒ぎはそんなに大きくならなかったかも知れませんが、なにしろ役割も市五郎ばかりではなく、なかには人望のある役割もあるのだから、そのいずれの役割が撲られたのか、次第によつては折助一統いっとうの面かおにかかわると思つて博奕ぼくち半ばで飛び出すと、かねて折助と懇意こんいにしている遊び人連中がその加勢にと飛び出して、哄どっと女軽業の前へ押寄せて来ました。

こうなると、この女軽業一軒ではなく、すべての見世物小屋がパツタリと商売を止めて、女芸人や年寄は避難させ、丈夫そなうなやつだけが合戦の用意をはじめます。長井兵助などは、長い刀をしきりに振り廻まわしました。

けれども騒動の中心になつたのはやはり娘軽業。木戸も看板も滅茶滅茶めっちゃめっちゃに叩きこわされて、木戸前で組くみんずほぐれつしてい

た群集は、ドツとばかりに場内へ乱入してしまいました。そこで、また敵味方、弥次馬もろともに、入り乱れて撲り合い噛み合いになりました。

見物の中で血の気の多いのは、頼まれもしないに弥次馬の中へ飛び込んで、喰い合い噛み合います。幸いに見物の中に気の利いたのは、菰張こもばりや板囲いたがこいを切りほどいて女子供をそこから逃がしたから、怪我人は大分あつたけれども、見物から死人は出さないうで一通りは逃がしたけれど、かわいそうに軽業をする美人連は、逃げ場を失うて、櫓やぐらの高みや軽業の台の上にかたまつて、高みから泣き声をあげていました。

「まあどうしようねえ、お国さん、おやまさん、あれ、うちの男衆がみんな殺されちまうじゃないか、わたしたちはどうなるんでしようねえ、親方さん、どうしましょう、助けて下さい、助

けて下さい」

「そんなに騒がないで静かにしておいで、そのうちにお役人が来て鎮めて下さるから。何だね、お前たちはそんな意気地のない。日頃危ない芸当をして命の綱を渡っているくせに、もう少ししつかりおし、いよいよの時には梁を伝わっても逃げられるじゃないか」

「それでも親方さん、危ない、どうしまししょうねえ、力持のおせいさん、お前は力持だからわたしを負つて逃げて下さいな、わたしはお前さんの蔭に隠れているわ」

平常は危ない芸当を平気でやっている軽業の美人連も、実地の修羅場では、どうしていいかわからないで一かたまりになつてふる慄えていると、そこへ一手の折助と遊び人とが、梯子伝はしごづたいにわつと集まつて来ました。

「あれ、下へ来ましたよ、怖い、親方さん、力持のおせいさん」  
美人連は号泣する。折助どもは先を争うて梯子からこの美人  
国へ乱入しようとして、わーつと喚いて折重なつて梯子から落  
ちました。

それは力持のおせいさんが、いま必死の場合に、商売物の立白  
を目よりも高く差上げて投げて落すと、白に打たれた折助十余  
人が一度に転び落ちたものです。

立白の一撃で、折助どもも少し怯んだが、直ぐに盛り返して  
梯子や小屋掛の丸太を足場にして、続々と登りはじめました。  
上からはあり合すもの、衣裳葛籠、煙草盆、煙管、茶碗、湯呑、  
香箱こうばこの類、太鼓、鼓、笛や三味線までも投げ尽したが、もう立白  
のような投げて投げ甲斐のあるものがありませんでした。力持  
のおせいさんは、鉄の棒を舞台に置いて来たことを齒齧はがみをし



て口惜しがるけれども、ここにはもはや蕙むしろよりほかに得物えものがなくなつてしまつたから、やむを得ず蕙むしろをクルクルと捲いて、それを打振り打振つて、登り来る奴輩やつぱらを悩ましています。

下では、折助と遊び人と木戸番と口上言いと出方と弥次馬とが、組んずほぐれつ揉み合つていと、近所の小屋からまたまた加勢が来る、弥次馬が来る、それをよそにして、この美人連の隠れ家かくがを見つけ出した連中はいい氣になつてこの一角を占領して、美人連を分取ぶんどろうとの興味から、蟻ありの甘きに附くが如く、投げられようと払われようと離れることではありません。

それと見て親方のお角は齒咬はがみをしながら、

「さあ、みんな、何でもいいから刃物をお持ち、剃刀かみそりもここに五挺ばかりあるから分けて上げるよ、舞台で使う脇差わきざし、刃引はびきがしてあるけれども、これでもないにはマシだよ、傍へ寄つたら

その剃刀で、面かおでも腕でもどこでもかまわなから、無茶苦茶に切つておやり、その脇差は切れないんだからつついておやり、眼玉でも鼻でもなんでも遠慮することはないから突いておやり、なんにも持たない人は簪かんざしをしっかりと持つていて、いよいよ傍へ来た時に、面の真中へ突き通してやるんだよ、もし刃物を取られたら喰いついておやり、どこでもかまわず喰いついて引つ掻いておやり。おせいさん、お前は力持だから、お前をみんなが恃たのみにしているよ、しつかり頼みますよ、お前さん一人で十人も二十人も手玉に取つておやり、お前さんは刃物を持たない方がいいよ。なに、わたしだつて五人や十人は相手にして見せるからね、たかの知れた折助なんぞに、この身体へ指でもさされてたまるものか」

お角は剃刀一挺を手に持つて、しきりと一座の美人連を励ま

して、自分も城を枕に討死の覚悟。

力持のおせいさんはこれに励まされて、持っていた薙を抛り出し、素手すてになつて、登り来る折助輩ぼろの鼻向はなむき、眉間みけん、真向まっこうを突き落し撲り落す。その他の連中も、剃刀、脇差、簪の類、得物得物をしつかりと持つて必死の覚悟。

「あれ——火がついた」

吊られてあつた篝火かがりびが、誰が切つたか地に落ちて、それが小屋の一角に燃えうつる。誰も消す人はない。

「あれ親方さん、火が。この小屋が焼けてしまいますよ」

火を見た美人連は、せつかく励まされた勇氣が一時に沮喪そそうしました。薙張むしろばりと幕と板囲いの小屋、火の手は附木つけぎを焼くよりも早い、メラメラと天井まで揚る赤い舌。

「そうれ火事だ」

組んずほぐれつしていた命知らず、さすがに火には驚いて、組打ちをしながら逃げようとして一層の大混乱。美人連を取囲んだ一隊は、早く攻め落して分取りをほしいままにしてから火を避けようと、強襲また強襲。

火の威勢が、いよいよ天井を這はい上つて、黒い煙と白い煙が場内に濛々もうもうと湧き出したその中から、

「うわーう」

旺然おうぜんとして物の吼ほゆる声が始まりました。これは獣の吼ゆる声。この場の人間どもの怒号、叫喚、愚劣、迷乱を叱咤しったするようにも聞きなされて、思わず身の毛をよだてるほどの一声でありました。

ムクは強いけれど、かわいいそうに鎖くさりにつながれていました。こんな騒ぎになる前に誰か気を利かして鎖を解いてやればよかつ

たものを、その方には誰も気がつく者がなかったから、鎖にながれたままではいるうちに、火がその背後から燃え出しました。「ああムクが繋がれている、ムクは強い犬だ、誰か行って鎖を解いてやらなくては焼け死んでしまう、かわいそうに、誰かムクの鎖を切っておやりよう」

お角は気がついて高いところから叫んだけれども、組み合わせ押し合いで、誰もそれに応ずるものがありません。

猛犬ムク！ お角もよくその猛犬であることは知っています。ムクが吼えると、牛や馬までが竦すくんでしまったこともこの道中で実見しました。

ムクが通ると、街道のいずれの犬も尾を捲いて軒の下へ隠れてしまったことも知っていました。桂川筋でかつらがわすじ一座の女が一人、橋を渡ると誤って川へ落ちて押流された時、あれよあれよと

騒ぐ人を駈け抜いて、ムクは水中へ飛び入り、着物の襟をくわえて難なく岸へ飛び上ったことも実見しています。旅芸人に因縁をつけたがる雲助や破落戸ごろつきの類が、強い面かおをしてやつて来た時にムクがいて、じつとその面を見ながら傍へ寄つて行くと、雲助や破落漢ならずものの啖呵たんかが慄ふるえてものにならなかつたことも再三あるのを心得ていました。猛犬ムクは、第一にお君にとつて忠実な家来であると共に、この一行にとつては、二つとなき勇敢なる護衛者であつたことを、お角は今この場合において思い出さな  
いわけにはゆきません。

「ムクを解いてやりさえすれば、ここにいる折助どもなんぞ幾人来たつて怖くはない、ナゼ早くそこに気がつかなかつたらう、力持のおせいを恃たのみにするよりは、あのムクの方がどのくらい強いけか。ああ、早く鎖を解いて、このやつらに喉のどしかけて噛み

散らかさしてやりたい、誰かムクの鎖を解いてやるものはないか」

お角は自衛の剃刀を逆手に持つて、一方には寄せ来る折助の強襲に備えて味方を励まし、一方には繋がれたムクの方を見て焦れに焦れたが、

「ええ、仕方がない、ああしておけばムクは焼け死んでしまう、おせいさん、力持のおせいちゃん、お前はわたしに代つてここを守つて、みんなの指図をしておくれ、わたしは今ムクを助けて来るから、ムクの鎖を解いて来るから」

「親方さん、危ない」

「ナニ、大丈夫だよ」

お角は剃刀を口にくわえて、着物の裾をキリキリと捲る。

今でこそ一座の親方になつて自分は舞台へ立たないけれども、

お角もこの道で叩き上げた女、高いところから舞台の方を見下ろして、人の頭の薄いところを見定めてヒラリと躍らして飛び下りた身の軽さ。

お角が下へ飛び下りたのを見ると、

「それ、美しい女が飛び下りた」

登りあぐねていた折助が、折重なつてお角の方へ抱きついて来る。

「何をしやがるんだい、折助め」

剃刀を振ると、はなばしら鼻梁を横に切られた折助の一人が、あ呀ツと言つて面をかお押える、べにがら紅殻のような血が玉になつて飛ぶ。

「この阿魔あま、太え阿魔だ」

大勢の折助が、お角ひとり折重なり折重なつてとりつく。

「何をしやがるんだい、お前たちの手に合うような軽業師とは



軽業師が違うんだ、ざまあ見やがれ」

お角は血に染しみた剃刀を打振って、群がり来る折助の面を望んで縦一文字、横一文字に斬って廻る。けれども、多勢たぜいを恃む折助、賭博打ばくちうち、後から後からと押しすべて来る。揉もまれ揉もまれてお角の帯は解けた、上着はすべり落ちる、それを引っぱる、引きちぎる。真白しむらな肉にく。お角はその覚悟で、下には軽業の娘の着るぬいぬいとりはんももひき刺繡ししゅうの半股引はんももひきを着けていた。剃刀一挺を得物の死物しにものぐる狂い、髪が乱れ逆立さかって、半裸体で荒れ狂う有様ものすじ、物凄ものすじいばかり。しかし、いくら気が焦あせつても多勢の男に一人の女。お角の剃刀はいつか打ち落おされてしまうと、忽ちたちに手取り足取り。

「口惜くししイッ」

お角は齒噛はみをしたがもはや如何いかんともすることはできません。こうしてお角を取って押えた折助どもは、忽ち胴上げときぎにして鬨ときぎ

の声を揚げて表の方へ担ぎ出す。高いところでそれと見た力持のおせいさん、

「あれ親方が捉つかまつてしまった、この野郎ども、覚えていろ」

城を守ることの任務を忘れて、お角を折助どもの手から取り戻すべく、やつと声をかけて力持のおせいは、高いところから飛び下りるには飛び下りたが——これは軽業が本芸ではない力持専門であるから、ヒラリと身を跳おどらしてというわけにはゆきませんでした。ただお角の危急を見て夢中でドシンと飛び下りたのは、臼を転がしたと同じことだから、下へ落ちても暫く起き上ることはできないのを、それと言って大勢が寄つてたかつて押える。いくら荒あばれても、俯うつむ向きに落ちたところを上から押しつぶされたのだから動きが取れないでいるうちに、演芸用の綱渡りの綱を持って来てグルグルと縛むすつて難なくこれいけどりも生捕。

主将、副将ともに捕われた後の美人連は、みじめ惨憺なものであります。羊の中へ狼が乱入したように、ひとたまりもなく引つ抱えられて引つ担がれる、泣き叫ぶ、狂う。

真先に大勢に担がれて行くお角は、齒を食いしばって、

「口惜しいッ、ムクはどうしたろう、なんだってムクに気がつか  
なかつたんだろう、早く気がついてムクの鎖さえ解いてやつ  
ておけば、こんなことはなかつたんだ、こうと知ったら君ちや  
んにムクを付けてやればよかつたものを、今となつては仕方が  
ない、誰かムクを助けてやつて下さい、ムクの鎖を解いてやつ  
て下さい。そうすればこんな折助なんぞ幾人來たつて、こんな  
口惜しい目に会やしないのに。ムクを、ムクを、ムクの鎖を解  
いてやつて下さいよう」

声を限りに叫びました。

九

お君が神尾主膳に柳屋へ呼ばれて、三味線を取り直した時にこの騒ぎが起りました。

お君は三味の糸を捲く手をとめて、

「何でございましょう、あの音は」

廊下をバタバタと駈けて来た女中が、

「喧嘩でございます、あの女軽業の小屋の内へお仲間衆ちゅうげんしゅが押し

かけて、いま大騒ぎが持ち上つたのでございます、人死ひとじしにが出来

ました、火事になりました」

「あの女軽業の小屋へ、城内のお方が押しかけてあの騒ぎ？　それは大変、こうしてはおられませぬ」

お君は三味線を投げ出して立ちかける。その袖を神尾主膳は押えて、

「あの騒ぎの中へ一人で行っては危ない」

「危なくてもよろしうございます、こうしてはおられませぬ、どうぞお暇を下さいまし」

神尾主膳の袖を振り切ったお君は、三味線も撥ぼちも投げ出してはだし跣足で飛んで帰りました。

「ああ、大変なこと、火がついてしまった、こんなことならモツト早く来ればよかった」

お君の来て見た時分には、小屋の裏手へ一面に火が廻つていきます。表へ廻ると、小屋の中から雪崩なだれを打って押し出す群集。

「あれまあ、親方さんが担がれて。力持のおせいさんまでがああして。まあまあ、みんな娘たちが連れて行かれてしまう、なん

という乱暴な人たちでしょう。これはまあどうしたんでしょう、誰も助けて上げる人はいないのかしら。どうしたものでしょうね。あれあれ、どこへ連れて行かれるんでしょう。わたしはまあ、どうしたらいいでしょう」

その時に、猛然として火の中より起るムクの声。

「ああ、そうだ、ムクだ。ムクは何をしているんだろう、みんながあんな目に会っているのに、ムクは何をしているんだろう。おおそうそう、ムクは芸が済むと、いつもあの鉄の棒につながれていたから、ことによると、あのまんまで誰も気がつかないで、ムクを鎖で繋ぎ放しにしておくんじゃないかしら。それだといくらムクだって動けやしない、みんながあんな目に遭つても助けてやりたくても助けられやしない。きつとそうだ、ムクは繋ぎ放しにされてあるに違いない。そんならムクは人を助け

るどころではない、自分がこの中で焼き殺されてしまうじやないか、かわいそうに。ムクがかわいそうだ、ムクや、ムクや」

お君はムクの名を連呼して、まつしぐら 驀然にこの火の中へ飛び込んでしまいました。煙に捲かれることも、火にあお煽られることも考える余裕はなくて、お君は火の中へ飛び込んでしまい、

「ああ、ムク、怪我をしないでいておくれかい、鎖につながれているだろうね、今解いて上げるから待っておいで」

袖で面をかお隠して煙の中に駈け込んだお君の手が鎖にかかると、ムクは五体が張り裂けるばかりの身震いをしました。

「ああ、早く逃げよう、逃げておくれ」

難なく鎖が外はずされるとお君とムクとは、丸くなってこの小屋の火と煙の中から逃げ出しました。お君には、もう逃げ場がわからなかつたがムクはよく知っている。犬と人とは辛かろうじて火

の外へ逃げ出して、

「わたしはいいから、早く親方さんや、娘たちを助けておやり、わたしはもはや大丈夫だから早く、お前、みんなの娘たちを助けて上げておくれ、悪い奴に担がれて向うの方へ連れて行かれただから、早く……」

十

女軽業の連中を引つ担いで来た折助どもは、闇に紛まぎれて荒川の土手、葭よしや篠しのの生えたところまで来てしまいました。

土手の蔭へ女軽業の連中を珠じゆず数つなぎにして置いて、

「さあ、大変な騒ぎになってしまった、これから先をどうするのだ、まさか焼いて喰うわけにもいくめえ、そうかと言って、



ここまで持つて来たものを、ほうりつぱなしにして逃げて行く  
と、娘たちが蚊あばに食われてしまふ、縄を解いてやれば、さいぜ  
んのようあばに荒れ出して始末にいかねえ、なんとか面白い工夫は  
ないか」

「なるほど、こうしておいて蚊に食わせてしまふのも残念なわ  
けだ、縄を解いてやれば荒れ出す、そのうちにもこの力持と来  
た日には、三人や五人では手に負えねえ、また身の軽い方は商  
売柄だから、ここらの田圃たんぼへ突つん逃げたら、蝗いなしを捕まえるよう  
な手数がかかる、どうしたものだ」

「いいことがあるわい、一度に縄を解いてやると物騒だから、一  
人ずつ縄を解いてやろうじゃねえか、ここにくじびきいるおれたち仲間  
と、女の仲間と数を読み合わせておいて、籤引くじびきとやろうじゃね  
えか、籤を引き当てた順で、この女たちを片っ端から一人ずつ

連れて、どこへでも勝手なところへ届けてやることにしたら面白かろうじゃねえか」

「そいつはいいところへ気がついた、籤引にしよう。籤引はいけれど、この力持なんぞを引き当てたら災難だ、下手なことをやればこつちがかえってギュウと潰つぶされてしまうんだから、あんまりジタバタさせねえように、ものやわからかに道行みちゆきという寸法に行きてえものだ」

「ものやわからかに道行という寸法に行けばそれに越したことはねえが、おたがいに和事師わごとしという面つらでもねえし、とにかく、籤としてみよう、籤を引いてみた上で、また何とか面白い趣向があるだろうよ」

「籤を引く前にこういう趣向はどうだ、手荒いことをしなくて、女を逃さねえようにする法がある、それは裸はだかにして置くこ

とだ、裸にしておけば、女は恥かしがつてどこへも逃げやしねえ、そうしておいてから籤を引いた方がよからう」

「なるほど、おれたちの仲間には智者が多い、裸にしておけば女は暗いところ<sup>こころよ</sup>にいたがつて、明るい方へ出るのをいやがる、それはいいところへ気がついた、それはいい心がけた」

折助はとうとう、こういう決議をしてしまいました。

「そうきまつたら、ゆつくりするがいい、誰か火種を持っていねえか、一ぶくやつてから仕事にかかりてえ」

この時、一蓮寺の境内で盛んに燃えている見世物小屋の火の手を快げに折助どもが見返つて、それから悠々仕事にかかろうと言っている途端に、

「あつ、何だ、どうしたんだ、えつ、どうしたと言うんだ、痛い！」

暗中摸索、折助どもがひっくり返し且つひっくり返し、何をどうしたのか一時に混乱して騒ぎ出しました。

「やつ、狼だ、狼だ、狼が出て来やがったぞ、ソレ大変だ」

山国にいと狼の怖るべきことを誇張して聞かされます。その狼の来襲と聞いて、さしもの折助どもが総崩れに崩れ立ったのは無理もないことです。鳥の羽音でさえ大軍を走らすのだから、狼の一声が折助を走らすのはまことに無理もないことでした。

事実また、この真暗な中へたしかに真黒な怪物が音も立てずに飛び込んで来て、ヒラリヒラリと飛び違えながら、当るを幸いに折助を噛みつぶし噛みつぶして廻る早業は、たしかに類を呼ぶ千足狼の類が、よき獲物ござんなれと、一挙に襲いかかったものと思われません。

それ狼！　と言つて総崩れに崩れて逃げ出したから、まだ幸いでした。もしぐずぐずしていて、それは狼ではない、犬だ、なんぞと正体を見届けたつもりで踏み止まろうものならば、挙げて一人も残さず折助が噛み伏せられてしまったに違いない。それでも一人か二人の死人を残し、多数の怪我人を出して、逸早いちはやくこの場を逃れ得たのが幸いでありました。

しかし、かわいそうに軽業の女たち、折助は逃げ去つたが今度はいつそう怖ろしい骨までしゃぶる獣、その襲撃と聞いて歯の根が合わなくなりました。けれどもその怖ろしい獣は、存外、女たちにはおとなしくありました。

縛られて歯の根の合わない女たちの傍へ寄つて、クフンクフンと鼻を鳴らして狎なれて来るのが不思議であります。

「おや、ムクだよ、ムクが来てくれたんだよ、ムクが助けに来

てくれたのだよ」

親方のお角がまずこう言つて叫び出した時に、女たち一同の恐怖の念が歓喜の声と変りました。

真先にお角の身にかけてられた縄に牙きばを当ててグイと引くと、お角の縄は無造作むぞうさに外はずされました。

「まあ、ムク、よく助けに来てくれたねえ、ほんとお前はわたしたちの命の親だよ」

お角はムクの首を抱えてしまつて、さすが氣丈な女が声を揚げて泣きました。一人の身が自由になれば、あとはみんな楽に解放されてしまいます。

こうして美人連は、ムクに助けられて再び一蓮寺の境内へ歸つて来た時に火事は鎮まつたけれども、余炎はまだ盛んなものでした。火消も来たり役人も来たりして騒動はスッキリ納まつて

しまいました。お君の姿をどこへ行つたか見出すことができません。

十一

「それじゃ何かい、どうしても江戸へ出かけるのかい」  
宿で七兵衛とが、んりき、の会話。

「兄貴、いろいろとお世話になつたが、江戸へ出て一旗揚げひとはたるつもりだ。が、んりき、もここらが年貢の納め時だから、小商売こあきなひの一つも始め、飯盛上りの女でも連合つれあひにして、これからは温和おとなしく暮して行きてえものだと思わねえこともねえが、天道様てんとうさまがそうは卸おろしてくれめえから、とてもことにまた逆戻りで、昼の上の往生おぼつかは覚束おぼつかねえだろう。どつちが早いか知れねえが、なに

ぶんお頼み申すよ」

「なるほど、お前も腕一本取られたのがあきらめ時だ、江戸へ落着いたら、そんなことで畳の上の往生を専一に心がけてくんねえ。もしまた、自分はそのつもりでも、世間が承知しねえ時はまたその時の了簡だ」  
りようけん

「俺もその了簡で、これから生れ変わるつもりだ」

「せんべつ 錢別というほどでもねえが、裏街道を通って萩原入りから大菩

薩峠を越す時に、峠の上の妙見堂から丑寅うしとらの方に大きな栗の木があるから、その洞うつつろの下を五寸ばかり掘ってみてくれ、小商売こあきないの資本もとでぐらいはそこから出て来るだろう」

「せつかくだが、そいつはよそう、悪銭あくせん身に着かずということになると幸先さいさきがよくねえからな」

「悪銭あくせんというのもおかしなものだが、それじゃお前は性質たちのい



い資本もとでを持つているのかい」

「一文なしだ、江戸へ出る小遣こづかいもねえくらいのもものだ」

「腕もなし、資本もなし、それで真人間まにんげんになろうというのはちつと無理だ、いま奉公に出ればと言つて、その腕じゃあ誰も使ひ手はあるめえ」

「なんとかなるだろうよ、運だめしだから、一文なしで出かけて行つてみよう、途中でのたれ死をしたらそれまでよ」

「その了簡ならそれでいい、自分はそれでいいけれど、もし人のかかり合いで金がなければ男が立たねえというような時節があつたら、遠慮なく俺の土蔵から出して使つてくんねえ」

「兄貴、大層なことを言うが、お前の土蔵というのはどこにあるんだ」

「それはいま言う裏街道では大菩薩峠の上、青梅宿おうめじゆくの坂下、江

戸街道の丸山台、表の方では小仏峠こぼとけとうげの二軒茶屋の裏の林の中と、府中のお六所様ろくしよさまの森の後ろと日野の渡し場に近いところ。まあこの絵図面を見ておくがいい、江戸から持つて来た金は裏の方へ蔵しまつておく、甲州で稼かせいだのは表の方へ預けておくんだ、幾らになつてゐるか自分でもその額はわからねえが、ああしておいても利息がつくわけではねえから、入用いりようの時はいつでも出して遣つて貰いてえものだ」

「なるほど、兄貴の仕事はなかなか手堅いや、こうして娘をあつちこつちへかたづけしておけば、いざという時どこへ飛んでも居候が利く。だが、この絵図面は見ねえ方がよかつたな、これを見たために、せつかくの娑婆しやば気が立ちおくれをして、どうやらもとのが、ん、り、き、に、戻、つ、て、し、ま、い、そ、う、だ」

「俺はそんなつもりじゃねえんだ、手前にこの金を器用に使つ

てもらえば金の冥利みょうりにもなるし、罪ほろぼしにもなるんだから、それで手一杯に地道じみちな商売をして、世間に融通をしてもらいてえんだ」

「それじゃ、どのみちこの絵図面は貰っておこう。しかし、これに手をつけるようじゃあ、がんりきもやっぱり畳の上では死ぬねえ。それじゃ兄貴、これから出かけるから、壮健たっしやでいてくれ」  
「そうか、そうきまつたら引留めもしねえが、途中ずいぶん気をつけて、猪や狼に食われねえように」

「裏街道を行くつもりでいたが、夜道は表の方が無事だから、やっぱり表を突つ切つてやろう、今から出りや夜明けまでに江戸へ入るのは楽なものだ。そのつもりで、さつき、握飯むすびを三つ四つ拵こしらえてもらつてあるから、あれを嘔かつて江戸まで行けば、それから先はお膝元だ。どっちへころげるかが、がんりきの運試し、

兄貴、またあつちで会おう」

「江戸へ行つて居所が知れたら、神田の明神様へ額を納めておいてくれ、めの字を書いた絵馬えまを一枚、そのうらへ処番地を書いて、お堂の隅っこへ抛り込んでおいてくれ、訪ねて行くから」

「合点がってんだ」

「おや、表がなんだか騒々しいな」

二人は言い合せたように耳を傾けて、

「半鐘はんしやうが鳴るぜ」

「火事だ火事だと言ってるよ。姉さん、火事はどこだい」

「一蓮寺でございますよ」

「一蓮寺？ おや、喧嘩だ喧嘩だと言ってるぜ」

「なるほど、喧嘩らしい、火事と喧嘩とお祭祀まつりと一緒に来たんじゃないあ事だ」

が、ん、り、き、は片一方の手で脚絆ぎゃはんをひねくる、それを七兵衛ははたから穿はかせてやって、身軽な扮装いでたちが出来上りました。

二人が外へ首を出してみると、火の子はこの家の上を撩乱りょうらんと飛んでいます。

それとはまた違ったところでその翌日、最初にあの騒ぎの口火を切った役割の市五郎が寝ているところへ見舞に來た金助、

「役割、どうでござんす、痛みますかね」

「うん」

「飛んだ御災難で」

「いまましいやつらだ」

「役割を見損なつて木戸を突くなんて、盲蛇物めくらへびに怖おじずとはこのことだ。その代り、さんざん、敵かたきを取つて、やつらを空裸からはだかに

してやりましたから、それで胸を晴らしておくんなさいまし。身から出た錆さびとは言いながら、あいつらこそ、小屋は焼かれる衣裳道具は台なし、路頭に迷うような騒ぎでて、こ舞をしていやがる、ざまア見ろ」

「狼が出て、ひどい目に遭あつたてえじゃあねえか」

「狼には弱りましたね、怪我あしたやつらは大部屋でいちいち手当をしています、片輪者かたわものがだいぶ出来上りそうで、面かおを嘔み潰されていかにも始末にいかねえのが五六人ありますよ。あんなのこそほんとに、面目玉めんもくだまを踏み潰されたとか嘔み潰されたとかいうんだろう。それに比べりや役割、こちとらは災難が軽い方でござんすよ」

「まあ俺の方は俺の方でいいが、金公、手前こそ命拾いをした上に、俺の命を拾ってくれたんだから、廻めぐり合せがよく出来て

いる」

「役割から言いつけられて、神尾の殿様の様子を見ようと石灯籠の蔭で隙見すきみをしているところを取捉とつかまって、すんでのことに息の根を止められようとするところを不意にあの騒ぎで、神尾の殿様も、こちとらをかまっちやいられず、急にお立ちとなつてしまったから、命拾いをしたつもりで騒ぎの方へ飛んで行つてみた時分には、人間の騒ぎは済んだけれども、火の威勢がばかに強くて、通り抜けられねえから、うろうろしていると役割の死骸……じゃあなかつた、役割が打倒ぶったおれてウンウン言つておいでなさるから、こいつは大変だと肩に掛けて引っぱって逃げると、拾い運のいい日はいいもので、役割の命を拾った上に、もう一つの拾い物。それはこういふわけなんですよ、わっしが役割を肩に引つ掛けて、煙に追蒐おつかけられながらあの椎しいの大木の

ところまで来ますとね、そこにまた人間が一つ倒れているんです。尤も今度の人間は役割の前だが、前に拾ったのよりもずつと綺麗きれいなんですから、それこそホントウの拾い物で、その時、わっしはどうかと考えましたね。椎の大木の下に倒れていたのは綺麗な女の子、女軽業の中でお君とって道成寺を踊る評判者、それがやはり役割と同じこと、死んだようになって倒れているのを見つけたものですから、わっしはそこで考えたんで。いつそのこと、役割を抛ほうり出してこの娘に乗り換えた方が得用とくようだと、すんでのことに役割の方を諦あきらめてしまおうかと思いましたが、まあ怒つちやいけません、一時はそう思いましたけれど、本来わっしどもも善人ですから、そんな薄情なことにはできません、と言つて一人で一度に二人の人を助けるわけにはいきませんから、役割を大急ぎで稲荷いなりのところまで担かつぎ出して



おいて、それから取つて返して、その女の子を首尾よく担ぎ出  
しました。が、この方がよつぽど担ぎ栄かつばえがしました。まあまあ  
お聞き下さいまし、その女の子はわつしの働きでいいところへ  
隠しておきますよ。あいつはね、人質ひとじちになるんですから、大事  
な代物しろものですよ。役割がよくなりなすつたら、御相談をするつも  
りでわつしがいいところへ隠しておきますがね、役割、これが  
癒なおつたら、あいつを妾なごにしておしまいなさいまし」

十二

宇津木兵馬が単身で、白根の山ふところを指して甲府の宿を  
出かけたのは、一蓮寺のあの騒ぎの翌日のことでありました。  
秋もすでに晩おそく、国をめぐる四周まわりの山々は雪を被かぶつています。

風物と人の身の上を考えると兵馬にも多少の感慨があります。このたびこそはと思つて、いつも心は勇むけれども、旅から旅を歩く間にはずいぶん果敢はかない思ひをするのです。

兵馬はこの頃になつてようやく、七兵衛の挙動に不審の点を発見してきました。片腕を落されたが、んりきという男との話しぶり、その調子が自分らと話をするのとはだ**いぶ**違つたところがある。七兵衛の挙動に合点がてんのゆかぬ節々ふしぶしを感じてみると、そこにもまた多少の心淋しさが湧いて来ないわけにはゆきません。

そこで、このたびの山入りも七兵衛には置手紙をしたただけで出かけてしまつて、白根の山めぐりをしてから後は、また次第によつては東海道筋へ廻るのだなと思いつつ歩いて行きました。一蓮寺の境内を通りかかつて見ると、どうでしょう、昨日あ

れほど賑にぎわうた見世物小屋のあたりは、すつかり焼けてしまつて、祭礼も臨時休業のような姿で、焼跡のまわりには、消口けしぐちを取つた仕事師の連中が立ち働いている有様を見て、昨夜の火事はこんな大きなことになつたのかなと、舌を捲きながら通り過ぎてしまいました。それから荒川の土手のところを歩いて行くと、土手の上の雑草が踏み躪にじられて、血痕けっこんがあちらこちらに飛んでいます。

兵馬は、それがまさしく人間の血であるらしいから少しく驚かされました。人間の血であつてみると、四辺あたりの草木の荒された模様から見て、よほどの人数が入り乱れて争つたものとしか見えません。祭礼で気が立つたあまり、ここで血気の連中が大格闘をやつたものだろうと、兵馬は心の中で推察しました。

これは昨夜の折助おりすけの狼藉ろうぜきと女軽業の美人連の遭難、その血の

痕あとというのはムク犬の勇猛なる働きの名残なごりであることは申すまでもありませんが、その風聞ふうぶんは兵馬の耳へはまだ入っていないでした。

その土手のところも通り過ぎ、竜王村というところへ出ようとする広い畑の中道で、

「頼むよう、助けてくれ！」

白昼とはいえ、人通りのあまりないところで助けを叫ぶ人の声、

「頼む！ 頼む！ 助けてくれ」

足を留めて見ると、およそ二町ばかりを距へだてた道の傍らの柿の木と覚おぼしい大きな木の上で、しきりに助けを呼んでいる者がある。

これはおかしい、木の上で、ひとりで呼んでいる。気狂きちがいで

はあるまいかと兵馬は思いました。木の上に登って助けに来てくれ  
というのは、たいてい大水の場合に限るようです。下を見れば  
水も何もありません、尋常平凡な畑道の中で、木の上から助  
けを呼ぶのはおかしいと思いつながら、宇津木兵馬はその方へ急  
いで行つて見ると、木の下に真黒な動物。

なるほど、犬に逐おわれたな、狂犬やまいぬだろう、大きな犬だ、あれ  
に逐いつめられて木の上へ登つて、そこから助けを呼んでいる  
というのは笑止しょうしなことだ、その声を聞けば子供でもないようだ  
が、大の男が犬に逐おわれて助けてくれは、いよいよ以て笑止な  
ことだと、兵馬は微笑しながら木の下へ近づくと、

「どうか助けて下さい、その犬を追い払やつて下さい、狂犬やまいぬでござ  
います。この通り向脛むこうずねを搔かつばわられて、着物なんぞもズタズタ  
でございます、すんでのことに命を取られるところを、やつと

ここへ逃げ上つたんでございます、そこに附いていられちゃあ逃げる事ができません、どうか犬を追い払つておくんないまし、助けておくんないまし」

木の上にいた男は半狂乱で叫んでいます。

「叱しっ！」

兵馬が犬を叱しかると、犬は首を振向けてブルツと身を慄ふるわせました。

その時、

「見たよな犬だ」

兵馬は一見してその非常なる猛犬であることを知り、同時にまたどこかで見たことのあるよな犬だとも思いましたけれど、咄とっさ嗟にはそれと思ひ当ることもありません。

「叱しっ！」

兵馬は小石を拾つて覗ねらいをつけると、犬はまた後退あとずさりして、兵馬の面かおを睨にらみながら唸うなる。

「叱ち！」

兵馬は石を振り上げて追う。犬は少しずつ後退り。

「どうかその犬をお斬りなすつて下さい、お腰の物で二つにぶつた斬つてやつておくんなさいまし、とてもとても、石なんぞで驚く犬じゃございませぬ、斬つてしまわなけりや駄目めでございませぬ、どうかお斬りなすつておくんなさいまし」

木の上では男おとこが喚わめく。

「エイ」

兵馬が打つた石礫いしつぶて、猛犬まんだいの額かぶに発矢はつしと当る。犬は一声高く吠うえて飛び退き、爛々らんらんたる眼まなこを以て遠くから兵馬を睨む。二つ目の石を兵馬が振り上げた時に、何なにと思うたか犬はクルリと廻めぐつ

て、兵馬の面を睨みながら鷹揚おうように後ろへ引いて行く。犬は兵馬の面とその手中の石とを見比しずしずべながら、徐々と引上げて行く態度、ちようど、名将が戦い利あらずと見て、味方を繰くり引きに引上げる兵法がこの態度であろうと、兵馬は敵ながら獣ながら、その退却ぶりの雄大にして痛快なのに感心せずにはおられませんでした。上杉謙信が退却する時にはこんな陣立じんだてであろうかとさえ思わせられました。

「石なんぞで驚く犬じゃございませぬ、ぶつた切つておくんなさいまし」

木の上でガムシヤラに叫んでいゝるにかかわらず、兵馬はこの石で犬を逐い、犬はついに兵馬に逐われてどこへか行つてしまいました。

「どこの畜生だか知らねえが、人を脅おどしやがる畜生だ、この近おどか



所ではついぞ見かけたことのねえ畜生だが、いやはや、馬鹿と  
狂犬やまいぬほど怖いものはないと太閤様が申しました」

木の上から下りて来た男を何者かと思れば、これはさきほど、  
役割の市五郎を見舞った折助の金公でありました。さすがさま  
りの悪い面かおをして、それでも兵馬に礼を述べるより先に犬の悪  
口をはじめます。

「なんだって旦那、わっしがこの村へちつとばかり用事があつ  
て甲府から出かけて来ると、その森の中から、のそりと飛び  
出して来やがったのがあの犬でございます。なんだか気味の悪  
い眼つきをして、わっしの面かおを見つめながら後をくつついて来  
るでしょう、癩しやくに触るから、いま旦那がなすつたように、石を  
振り上げて追ひ払おうとしますと、あいつが凄いで唸りまし  
たね。その声でブルブルと、わっしは慄え上つてしまいました

よ。旦那のように睨みが利きませんから逃げ出しました。とうとうここまで追い詰められてこんな怪我をした上に、ごらんなさい、着物の裾なんぞはこの通りズタズタでございます。ほんといまいとに忌々しい畜生つたら」

金助は兵馬に礼を言うことを忘れて、犬の悪口ばかり言います。

「いつたい、この村のやつらが悪い、あんな性質たちの悪い狂犬やまいぬを放し飼いにしておくのがよろしくねえ、叩き殺してしまやがりやいいんだ」

今度は村の人へ飛沫とばつちり。

この男はしきりに狂犬呼ばわりをするけれど、兵馬は決してあの犬を狂犬とは思っておりません。

「さて、お前さんはこれからどこへ行かれるな」

「ついそこの童王村というところまで参りますんで」

「帰りに、また犬が出たらなんとなさる」

「脅おどかしちやいけません、もう懲こりこり々でございます」

「しかし帰りには必ず出て来る」

「冗談じょうだんじゃありません、こんど出やがったら、村の若い衆を大勢たのんで叩き殺してしまいます」

「そんなことをするとかえつてよろしくない。察するのにお前は、何かあの犬に怨うらみを受けるようなことをした覚えがありません」

「驚きましたね、いくら人間が下等に出来上っていたからと申しまして、まだ犬に恨みを受けるようなことをした覚えはございません」

「犬というものは、三日養わるれば生涯その恩を忘れぬ代り、ひ

とたび受けた恨みもまた死ぬまで覚えているということだ。どうかするとお前は、あの犬に対して意地の悪いことをした、その祟りたたを受けて見込まれたものと、どうもそうしか思われぬ」

「そんなことは決してございませぬよ、第一、あんな大きな黒犬を見るのは今日が初めてなんでございますから。初めて見たものに恨みを受けるはずがないじゃございませんか、狂犬やまいぬの人食ひとくらいに違いございませぬよ」

「とにかく、わしもあちらへ行く者、竜王村まで一緒に行きましよう」

兵馬は金助を連れて竜王村へ入ります。この時分から時雨しぐれの空模様が怪しくなってきました。

「降らなけりやようございますね」

宇津木兵馬は一緒に竜王村の方へ入る途みちすがら話して行くと、この金公という折助がいかにもくだらない人間であることを知りました。下手へたに優しく話してゆくと、直ぐ附け上つてしまふ、そうして今の先、木の上で助けてくれ助けてくれと叫んだことなどは打忘れて、自分の得意げなことをべらべら喋しゃべる。兵馬はなるほどくだらない人間だと思つて、いいかげんに話していると、自分が川柳せんりゅうをやることだの雑俳ざつばいの自慢だのを、新しそうな言葉で齒の浮くように吹聴ふいせつする。兵馬はいよいよくだらない折助だと思つたが、ただくだらないばかりではなく、兵馬の話しぶりを見ては折々ひっかけるようなことをする。これでは犬に逐おわれるのも無理はないと、胸に不快な思いをしながら、ともかくも竜王村へ入つて来ました。

竜王村へ入つて村を横切ると釜無川かまなしがわの河原へ出ます。信玄の

時代に築かれたという長さ千間の一の堤防<sup>だし</sup>。その上には大きな並木が鬱蒼<sup>うつそう</sup>と茂っている。右手には高く竜王の赤岩<sup>そび</sup>が聳<sup>そび</sup>えていゝる。金公が先に立つてその堤防の並木の中へ分けて行く時分に、さきほどから怪しかった時雨<sup>しぐれ</sup>の空がザーッと雨を落してきました。

金助は、兵馬の先に走って、同じ堤防の並木の中の、とある神社の庭へ走り込んで、

「こんにちは、こんにちは」

戸を叩いたのは三社明神<sup>どうもり</sup>の堂守の家。

「金公かい」

破れ障子から面を出したのは腰衣<sup>こししろも</sup>をつけた人相のよくない大入道。

「木菟<sup>ぎう</sup>入いたか」

ここは神社であるはずなのに、この堂守は怪しげな僧体をしているから、兵馬は変に思っていると金公が、

「さあ、どうかお入りなすっておくんさいまし、これはわつしどもが大の仲よしで木菟入と申します、見たところは気味の悪い入道でございますが、附合つてみると気の置けないおひとよしの坊主でございます」

金公は金公で、この坊主を捉つかまえて木菟入木菟入と言ひ、坊主は坊主で金公を捉まえて金公金公と呼捨てにしていると、坊主を見れば、なかなか懇意な間柄らしいが、兵馬はここで雨宿りをするつもりで中へ入つて見ると、炉の中には釜無川で取れる川魚が盛んに焼かれてあるし、貧乏徳利がいくつも転がっています。

雨はなかなかやみそうもないから、兵馬もつい勧められるま

まに草鞋わらじを取つて上へあがりました。

そうしているうちに、坊主と金公が碁を打ちはじめました。見ていると金公もかなりに打てる、坊主はなかなか強い、金公に三目置かして打っているがまだ坊主の方がずっと強い。金助はしきりにキザな面かおをして例の齒の浮くような文句と一緒に石を並べて、時々キュウキュウ言わせられていると、坊主はそのたびごとに高笑いをして金公を頭ごなしにばかにする。

「どうだ金公、こいつが負けたら四つ置くか、それとも一升買うか。キュウキュウ言つたところで碁になつておらんわ、投げた方がよかろうぜ」

実際、金公は弱らせられているらしく、キュウキュウ言つて盤面を見つめていたが、やがて窮余の一石をパチリと置く。

「おやおや、自暴やけとおいでなすつたね、自暴と氣狂いこわいほど怖い



ものはないと権現様がおつしやつた。自暴もまた侮るべからず、こうして継いでおけば問題はござるまい」

「なるほど、うーん」

金公が唸り出しうなてやがて降参してしまふと大入道大得意、克蘭カラんと打笑う。兵馬はそれに興を催して、

「御出家、一石お願い致しましょうか」

「おやおや、お前様も碁をお打ちなさるか。それはそれは、お若いに頼もしいことじゃ。金公では下拙げせついささか喰い足りずと  
思っていたところ、さあ遠慮なくいらつしやい」

「しからばこの人と同じこと、三目でお相手を致してみよう」  
「よろしい、三目、さあいらつしやい」

「パチリ」

「パチリ」

「これは感心、定石じょうせきを心得ておいでなさるところが感心、とかく初心のうちには、そう打つておいでになるがよろしい、其許そのもとはなかなか筋がようござるな、見込みのあるお手筋てすじじゃ、そうして定石すなおから素直すなおに打ち上げてゆかぬと悪い癖くせが出て物にならぬ。物の譬たとえがここにござる、金公などを御覧ごらんじろ、器用くわい一辺で、あつちへ遣繰やりくり、こつちへ遣繰やりくり、キュウキュウひど工面くめんをしながら打っている、それで年中ピーピー苦しみ通しで、おしまいの果てが投げと来るから目も当てられない。そこへゆくげせつと下拙げせつの如く定石から打ち込んだものには、悠揚ゆうやうとして迫らぬところがあゝ、よし勝負には負けても碁には勝つというものじゃ。ここにござる金公の如きは勝負にはむろん負け、碁においてはもとより問題にならず」

引合ひあいに出された金公が苦にがい面めんをする。

「パチリ」

「パチリ」

「ええ、これはうまい手を打ったな、これはやられたわい、なかなか油断のならぬ手筋じゃ、金公を相手にするりょうけん了簡ではチトむずかしい、金公の如きを相手にしている故、下拙もつい見落しが出来て困るて。仕方がない、そこはそれ若い者に花、しかしこれはどうも金公とは違う」

一口上げに金公金公と、よい方へは引合いに出さないから、金助はいよいよ不平な面をします。

「いや、なかなかやるやる、お前様はよい師匠に就いて稽古をなされたな、ことに上手うわてのものとのみ手合せをしておいでと見えて、下手したてより上手へ強いお手筋じゃ。いや、頼もしいござる。ハテこの一手、これがわからぬ、いやこれはどうも」

木菟入は頭の上へ手を置いてしまつたが、大分こたえたと見ずくにゆうえて、金公の柵下たなおろしも出なくなつて唸り出すと、今度は金公が首を突き出して、

「入道、少し困つたな」

「うーん」

「なるほど、定石から打ち込んだものには違つたところがあるな」

「うーん」

「入道、投げた方がおためになりそうだぜ、碁になつておらん、投げて一升買うか、そうでなければ白をお渡し申して出直すんだ」

「うーん」

やつとのことに入道が一石、千貫の石を置くような手附てつき。

兵馬は番町の伯父の家にいる時、伯父から手ほどきの定石を習い始め、余技とは言いながら相当に心得たものでありました。この坊主なかなか弱くはないけれど、自分に対して白を持つほどの腕ではないと見て取つたのに、三目置いているから、兵馬にとつては楽なもの、入道はなかば頃からさんざんに苦しんで、とうとう降参してしまつて苦い面にがをすると、金公が大よろこびで復讐の意味を兼ねた駄句を作つたりなどして嘲弄します。入道甚だ安からず思つてまた一石、戦いを挑むいど。こんな閑ひまつぶしをやつていたが雨はやまないのに、入道は負ければ負けるほど躍起やつきになつて、兵馬に畳みかけて戦いを挑む。兵馬もその相手になつて、とうとうその晩は金公と一緒にこの堂守の家へ一泊することになりました。

兵馬はその晩、勧められるままに、この堂守の家へ泊り込ん

でしまいました。

兵馬を一室に寝かしておいて、かの木菟入と金公とは、酒を飲み出します。金公が薄っぺらな口先でしきりにキザを言つては入道に愚弄されるのが、兵馬の寝間へよく聞える。愚弄されても金公は一向お感じがなくべらべら喋る。さきに柿の木の上で助けてくれ助けてくれと泣き声を出したことなどはおくびも出さず、鬼の三匹も退治して来たようなことを言っているから、兵馬はイヤな奴だと思ひます。

この二人はベチャクチャと喋つた揚句あげくに、打連れてこの堂を出かけて行きました。あとにひとり残された兵馬。大方あいつらはここだけでは飲み足りないで近所の居酒屋へでも飲みに行つたものだろうと思ひました。それで兵馬は落着いて眠ることができました。

その夜中に俄然<sup>がぜん</sup>として兵馬の夢が破られたのは、<sup>すさま</sup>凄じく吠える犬の声からであります。

兵馬はその犬の声で夢を破られると同時に、外で、

「痛ッ」

と絶叫する人の声。ガバと匆<sup>は</sup>ね起きて雨戸を推<sup>お</sup>し、燭台を取つて外の闇を照して見ると、二人とも打倒れてウンウンと唸っているのは金助と木菟<sup>ずくにゆう</sup>入であるらしい。その傍に立っている人の影が一つ。

「もし、あなたは宇津木様ではございませんか」

「エエ？」

外から呼ばれたわが名。それは女の姿であり女の声であることだけはたしかです。

「もし、わたしは君でございませぬ、伊勢<sup>おおみなと</sup>の大湊を出る時に船で

お世話になりました、あの君と申す女でございます」

「ああ、お君どのか」

「そんなら宇津木様でございましたか、よいところでお目にかかりました」

「不思議なところでお目にかかる、ともかくもこれへお入りなさい」

「御免下さいませ。ムクや、このお方はわたしの御恩になったお方ですから吠えてはいけません」

「ああ、その犬は、お前さんの犬であったか、昼のうちはこの先の原の道で見かけた犬。そこに怪我けがしているのは誰じや。お、ここの堂守と途中から一緒に来た男、さてこそ何か仔細しさいのありそうな」

「これには長いお話がござりまする。この人たちは、わたしに



向つてよくないことをしましたから、それでムクが怒つてこんな目に会わせたのでございます、お気の毒でございませうけれど、こうしなければわたしが助からないのでございませうから、どうかムクの罪を許して下さいまし、ムクが悪いのでございませうから」

「なんにしてもこのままにはすて置けぬ」

兵馬とお君とは、力を合せて木菟入と金公とを家の中へ担かつぎ込んで、ムクに嘯かいはうまれた傷を介抱してやりました。

十三

兵馬とお君とは思いがけない対面でありました。お君の語るところによれば、一蓮寺の火事の時、椎しいの木の下に昏倒してい

る間に、自分は誰にか助けられて見知らぬところへつれて来られたが、その助けたというのはここにいる金助で、連れて来られたのはこの堂守の家であります。

堂守はこの明神の御輿みこしぐら倉の中へ自分を隠しておいたというのと、それは金助の頼みで、今宵は入道と二人、酔っぱらつて来て、自分をまたつれだして妾にするとか女郎に売るとかいつているところへ、突然にムクが現われてこの有様となつたということですよ。

お君はまた、兵馬と別れて舟から上つて以来のことを落ちもなく語ると、兵馬は飽かずに聞いていて、お君の身の上に波瀾の多いこと、そのたびごとにムクの手柄の大きなことに感嘆せずにはおられませんでした。

「ああ、それで思い当つた。この犬がどうも尋常の犬でない」と

思つたら、いつぞや伊勢の古市の町で、槍をよく使う小さな人、あまりに不思議の働き故、頼まれもせぬに槍を合せてみたところ、その傍にいた一匹の黒い犬、その面魂つらだましい、ちつとも油断がな  
らなかつた。さてはこの犬であつたか」

二人の話はそれからそれと続きました。その時、不意にけた  
たましい警板けいばんの音。

警板はこの堂のすぐ背後うしろ、杉の大木に掛けてあつたのを、い  
つのまに抜け出したか、そこへ上つて堂守の入道が力任せに叩  
いているのです。

「あの音は？」

兵馬もお君も驚きました。

二人がその音に驚くと、ムクも首を上げて尾を振ります。

そうすると、わーという人声。早くもそれと覺さとつた宇津木兵

馬は、

「お君どの、こりや大事出来、早く逃げにやならぬ」

「何でございましょう、あの音は」

「この堂守が抜け出してあれを打った、それで村の人を集めている」

「わたしたちは何も悪いことは致しませぬ」

「もとより悪いことはしないけれども、何をいうにもこっちは旅の身、向うは土地馴染のある人、悪い名を着せられても急には明りが立たぬ、そのうち血氣に逸る土地の人、どのような乱暴をすまいものでもない、今のうちに早く逃げなければならぬ」

戸の外では人の声が噪がしい。

「泥棒が入ったぞ、俺もこの通り傷を負ったが、甲府から来た金助は殺された、お堂の本尊様も明神の御宝蔵も荒された、賊

はまだ若い、若い前髪の侍と、女が一人に犬が一疋、その犬が強  
いから嘸かまれないように用心さつしやい」

警板の木の上で入道がおおいに叫ぶ。

兵馬はお君を促うながして一目散に逃げ出しました。

大並木をくぐり抜けて、堤を駈け下りると釜無河原。

兵馬はついに堪こらえ兼ねて、お君を背に負つて河原を走りまし  
た。提灯ちようちんや松明たいまつで追いかけて来る大勢の人。

「それ河原へ下りたぞ、向うの岸へ合図をしろ」

ようやく川の流れへ来て宇津木兵馬、浅瀬を計り兼ねて暫ら  
く思案に暮れていたが、そのうちに乗り捨てられた川船の一隻  
を、ムク犬が見つつけて飛び込むと、兵馬はこれ幸いと同じくそ  
の舟へ飛び乗つて、お君を下ろすとともに、竹の竿を取つて岸  
を突きました。

舟は難なく釜無川の闇を下つて行きます。

ほど経て舟を着けたのは高田村というところ、そこで陸おかへ上りました。

高田村で舟を捨てた時分には、もう夜が明けていました。鰍沢かじかざわまではいくらない道程みちのり、兵馬はお君のために道を枉まげて鰍沢まで来て宿を取りました。

それから兵馬は、甲府へ沙汰してお君をもとの軽業の一座へ送り返そうとしているうちに、困ったことにはお君が病氣になつてしまいました。

行手に心の急ぐ兵馬も已やむことを得ず、それを介抱せねばならなくなりました。

幸いにお君の病氣は大したことはなく、四日ばかりするうちにすつかりなおつてしまい、お君はやつと愁眉しゅうびを開いていると、

そこへ甲府から便りがありました。その便りはまたも兵馬とお君の二人を当惑させるものでありました。

お君が入って来た軽業の一座は、あれから散々ちりぢりになつてしまつて、たよりまたも旅廻りをしているか、江戸へ帰つたか、それさえ消息がないということ、お君は落胆がっかりしました。兵馬も困りました。

お君は、仕方がないから、わたしはムクを連れて江戸へ帰つてみようと言ひ出しましたけれど、それはずいぶん危険なことと言わねばならぬ。けつきよく兵馬はお君を当分の間この宿へよく頼んで預けておいて、自分だけが山入りをすることにきめ、お君は兵馬に気の毒でたまらないけれども、その好意に従つて、暫らく鰍沢の町に逗留することになりました。

今朝、お君を残して山入りをした兵馬。

ムクを連れて兵馬を送つて行つて別れた最勝寺前、お君には

兵馬の面影<sup>おもかげ</sup>が胸を搔<sup>か</sup>きむしるほどに迫つて来て、一人では居ても立つてもいられなくなりました。



大菩薩峠 女子と小人の巻

底本：「大菩薩峠 3」ちくま文庫、筑摩書房  
1996（平成 8）年 1 月 24 日第 1 刷発行  
1996（平成 8）年 3 月 1 日第 3 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房  
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 10 月 3 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。